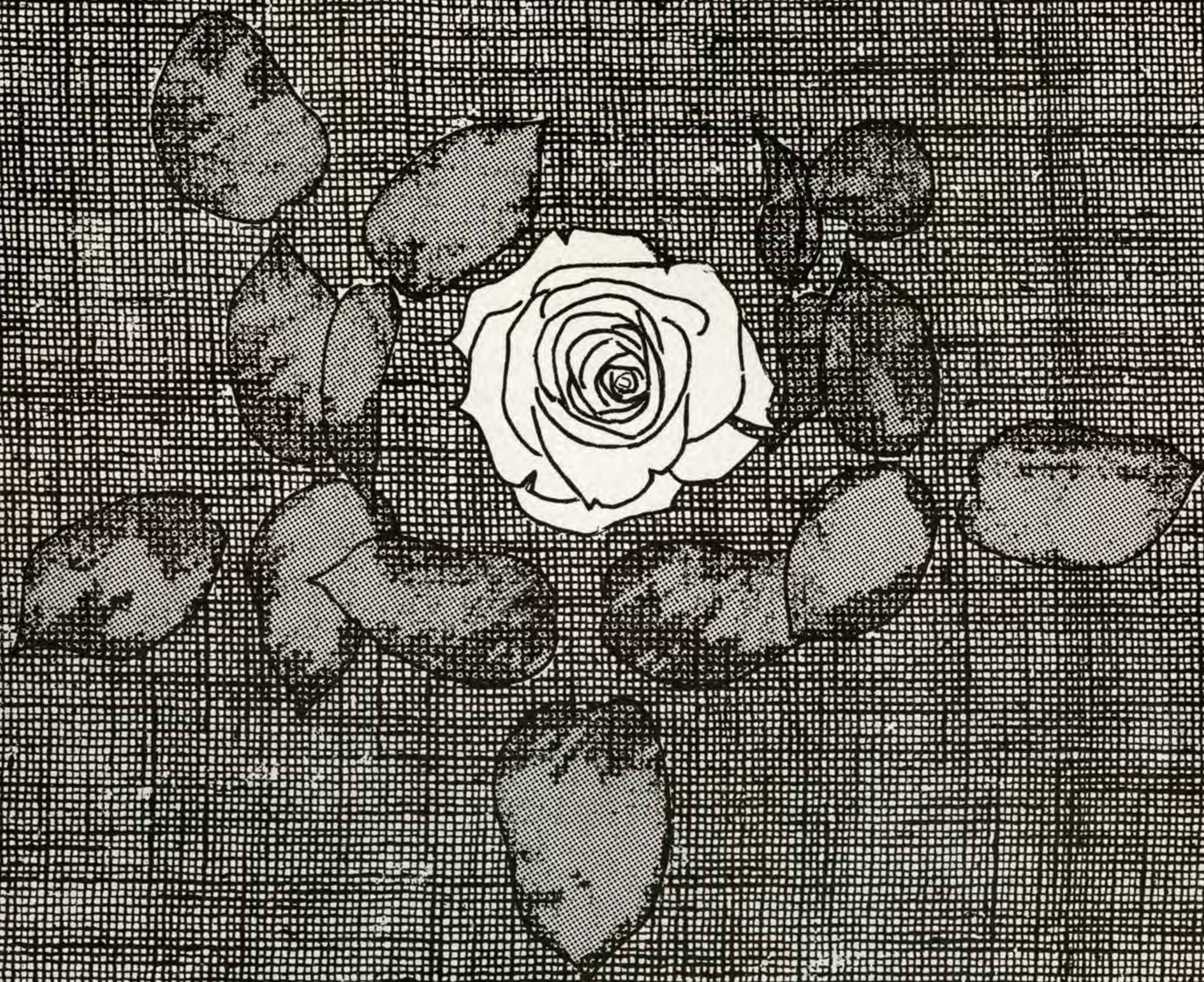


1972



東京芸術大学彫刻科

白蟻の卵たち
起きよ
巨大な建築の礎を崩せ

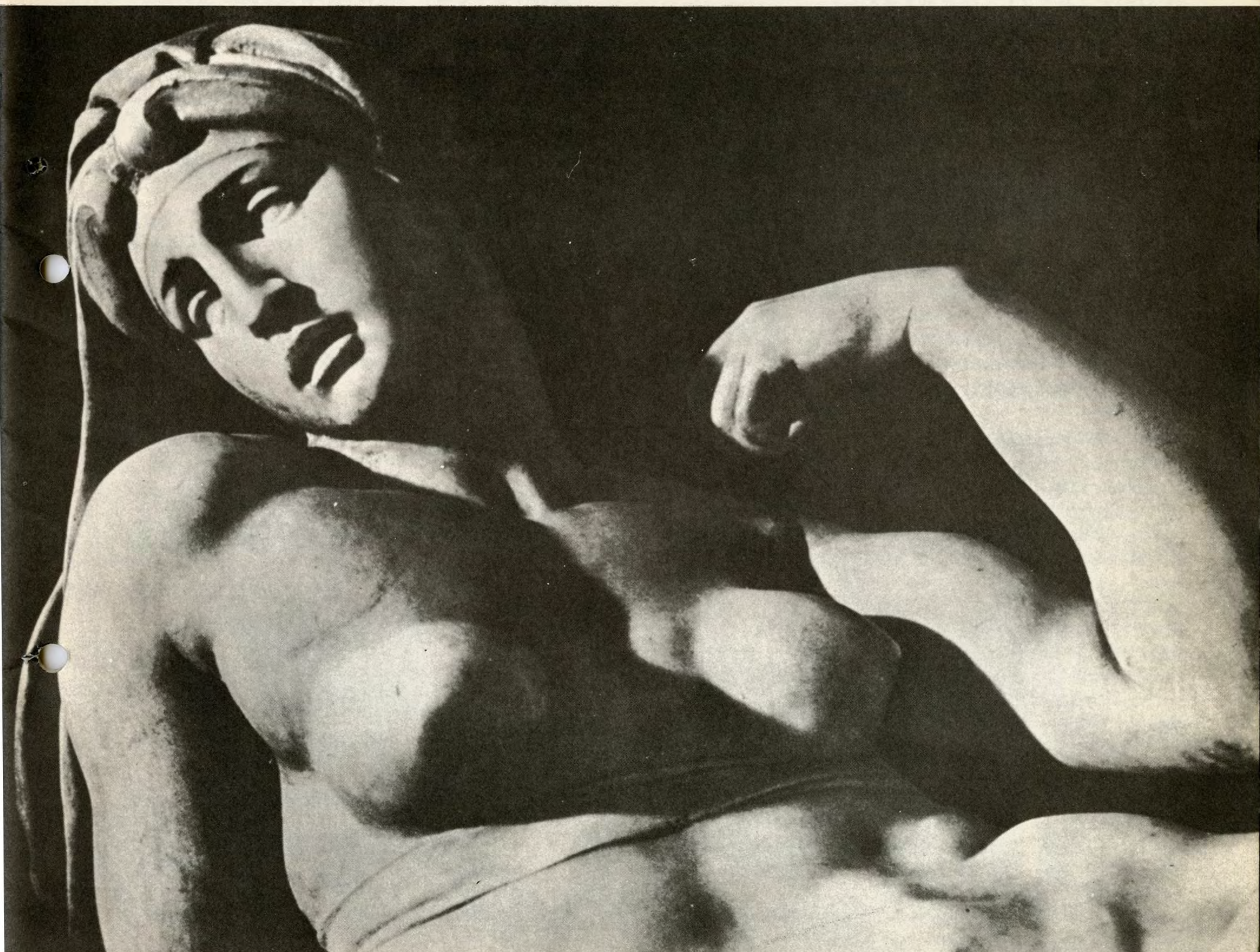
君らのいるのはここでない。
君らの心はここにはない

追いかけてよう
君らの心を

旅をせよ
燈をめざして
とどまることなく

大きな晴れた空の下
新たな礎を築こう
青春の夢に忠実に





つれづれに

助教授 千野 茂

今夏残暑の厳しかった或日の午後、所用で中野へ行くため、江古田駅へ下車して、バスに乗るべく信号の緑にかわるのを待ちながら、不図後ろにある古本屋の狭い飾窓を見ると、永井荷風 勲章。初版本 とあるのが眼に入った。

私は心中こおどりして早速其を求めた。

然しこれは、荷風私家版の、腕くらべ。遷東綺譚。のごとき稀覯本では決してなく、終戦間もない昭和22年5月発行とあり、出版元は扶桑書房となっている。

紙質もザラ紙で悪く、勲章ほか12・3編の短篇を集めた小冊子であるが、粗末な箱の表に、6センチ角くらいの大きさに薄緑の細い縁がとられ、その中に、小説 勲章 荷風著 と、荷風自筆による木版刷り和紙の貼られたのが、和紙の手ずれている故に、荷風の肉筆かと見えて奥ゆかしい。

勲章は昭和17年12月8日に脱稿された作品で、荷風はこの年64才であった。

ところで、この短篇とじつによく似た事実が、荷風の日記、断腸亭日乗（昭和13年10月24日）に記載されている。

10月24日。晴。夕方ちかく電話の鳴りひびく音何ともなく聴て訪問記者の来るが如き心地せられしかば、夕飯もそこそこにカメラを提げて家を出でオペラ館に往く。この芝居の楽屋に出入する弁当屋年60ばかりなる老爺あり。岡持に堪忍屋とかきたるを人々カニヤとよぶなり。毎日綱島より浅草へ通ひ来る由。家は京浜線綱島駅のほとりなりと云ふ。

如何なる人の成れの果なるや知らねど其面立様子より考るに小商人にはあらず若き時より屋台店でも出していたるものか。然らずば人力車夫なりしかと思わるる身体付なり。

3、4日前の夜なりき。岡持と共に日露戦争の時下賜せられし勲八等瑞宝章と従軍記念章とを持ち来り役者踊子等に之を示し、其場に居合せし余に向いて役者の軍服を借り此勲章を下げて見ますからどうぞ一枚写真をとって下さいと云ふ。真情面に顕はれて哀れに思はれたれば、余この夜カメラと写真用の電球を携へ踊子の大部屋に至るに、老爺は腹掛の中に入れたる勲章を取出し、衣裳の軍服へこれを縫付け姿勢を正してカメラの前に直立したり。写真撮影の後老爺はしばらく茫然として其場に立ちすくみ何やら物思ひに沈みし様子なりしが、突然淋しき微笑を浮べ30年前にはわたしも元気でしたがもう駄目ですよと言ひ終りてぬぎたる軍服を丁寧にあたみ、又暫く無言にてこれを眺め居たり。何事も知らぬ踊子等は三々伍々舞台より帰り来り衣裳をぬぎかへて弁当の注文をなす。親爺はよしよしとうなづき岡持下げて階段を降り行きぬ。(略)

10月29日。陰。(略)夜9時過ぎオペラ館に至り過日撮影せし写真を弁当屋堪忍屋の老爺に贈る。(略)

勲章は。芸人踊子相手のはかない渡世をしている仕出屋を主とした随筆風の小品であってなんの変哲もないようなもの

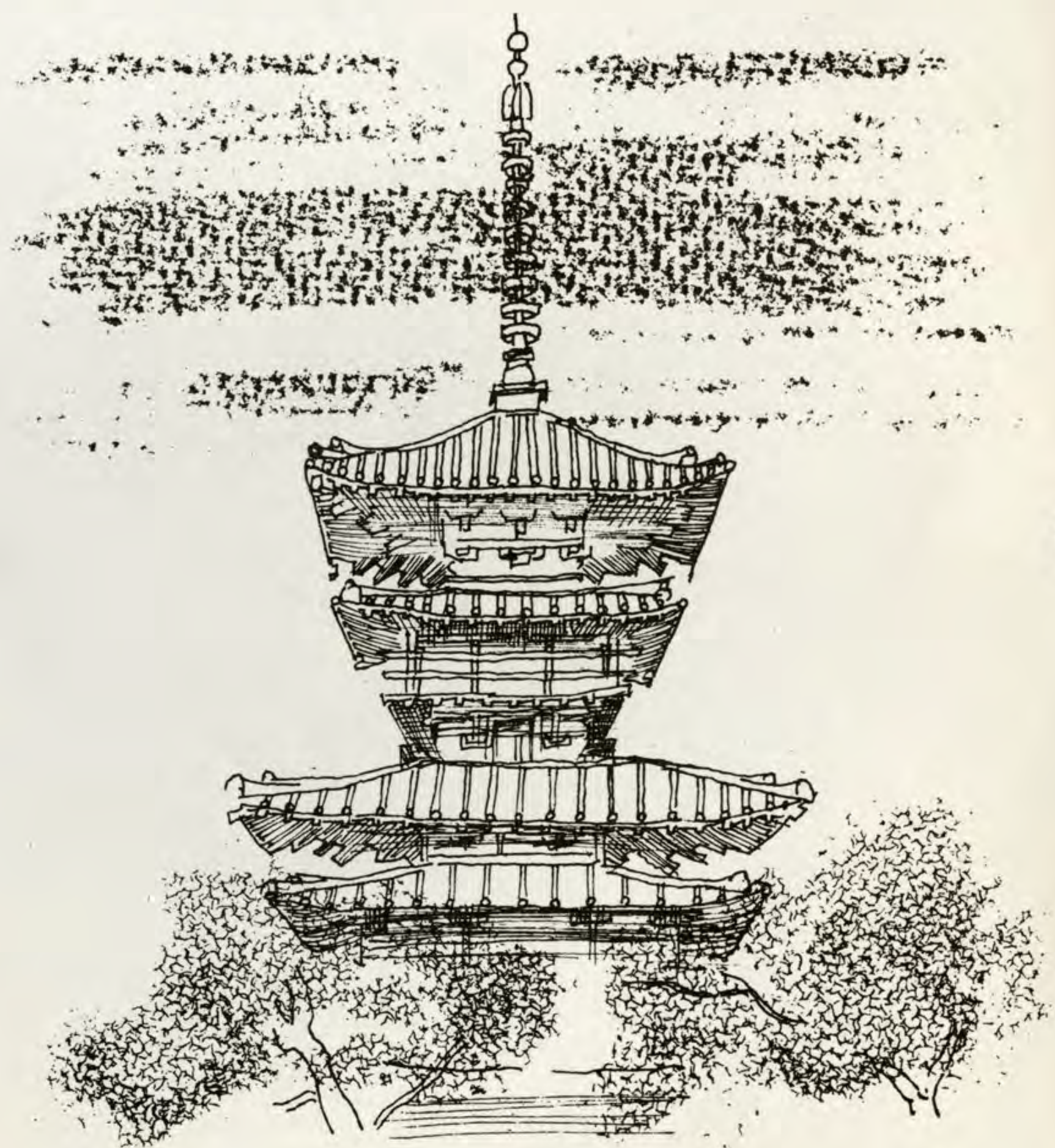
でありながら、熟読含味すると、荷風の詩情のあたたかく味わい深い佳品である。

日記にある堪忍屋は、小説では鮫屋のおちさんと踊子たちに言われており、現像して気がつく、勲章のつけどころが規則と違って、軍服の胸の右側になっていた。それを引伸して焼付けをする時、フィルムの裏表を逆にしてうまく紛らせ作り楽屋へ持って行った。

ところが、あれきり鮫屋は姿を見せず、どこの誰とも住所氏名もわからぬ老爺であってみれば、脳溢血か何かで死んでしまったのであろうというふうに結ばれている。

私は断腸亭日乗と勲章を繰返し読みながら迫真力のある日記文と、創作として作りあげられた、構成に格調高い詩情の妙味とを比較して尽きない興味を覚えると同時に、ひいてはそれを美術の分野に結びつけて考える。

世界は違っても、ドガ。セザンヌ。マイヨール。古径。繁二郎。等々巨匠の作品のエスキースと作品との相違は、皆それに通じるものではないだろうか。そんなことを思いながら仕事をするのも忘れて、狭い庭の真昼の片隅に鳴く虫の音に、しのびよってくる秋の気配の中で、いささかなほりだし物を得た喜びに、この下手な文を書いているのも、また人生の楽しいひとときというものではなかろうかと思うのである。



旧詩二題

愚者と妻と

助教授 伊東繁(傀)

妻といっしょに歩いてみると
 とある古道具屋の前通りかゝり
 帆船の模型が眼にはいった
 これいゝな
 私は帆船のまはりをめぐり私はとてもほしくなった
 これいくらですか
 千五百円です
 ? けれども私はとてもほしい
 すこしまけませんか
 さあ
 私はふり返りふり返り店を出たが
 私は妻に相談した
 妻はおどろいて私の顔を見直した
 あんな玩具^{おもちゃ}を買ふくらいなら靴を買はねばなりません
 私の靴は底革が半分口開いて
 靴屋でも修繕のしゃち投げだした
 だけれども
 靴いよいよ駄目になれば
 草鞋^{わらじ}はいてもいゝからあれ買いたい
 私は簞笥の底に妻がしまった
 全財産をおもひ浮べた
 私は全財産の大半あの古道具屋に渡しても
 あれ買って抱へて帰りたい
 まづしげなる部屋でもあれ飾り
 あの船に乗ってわたしは
 海ゆく夢をみたいものだ

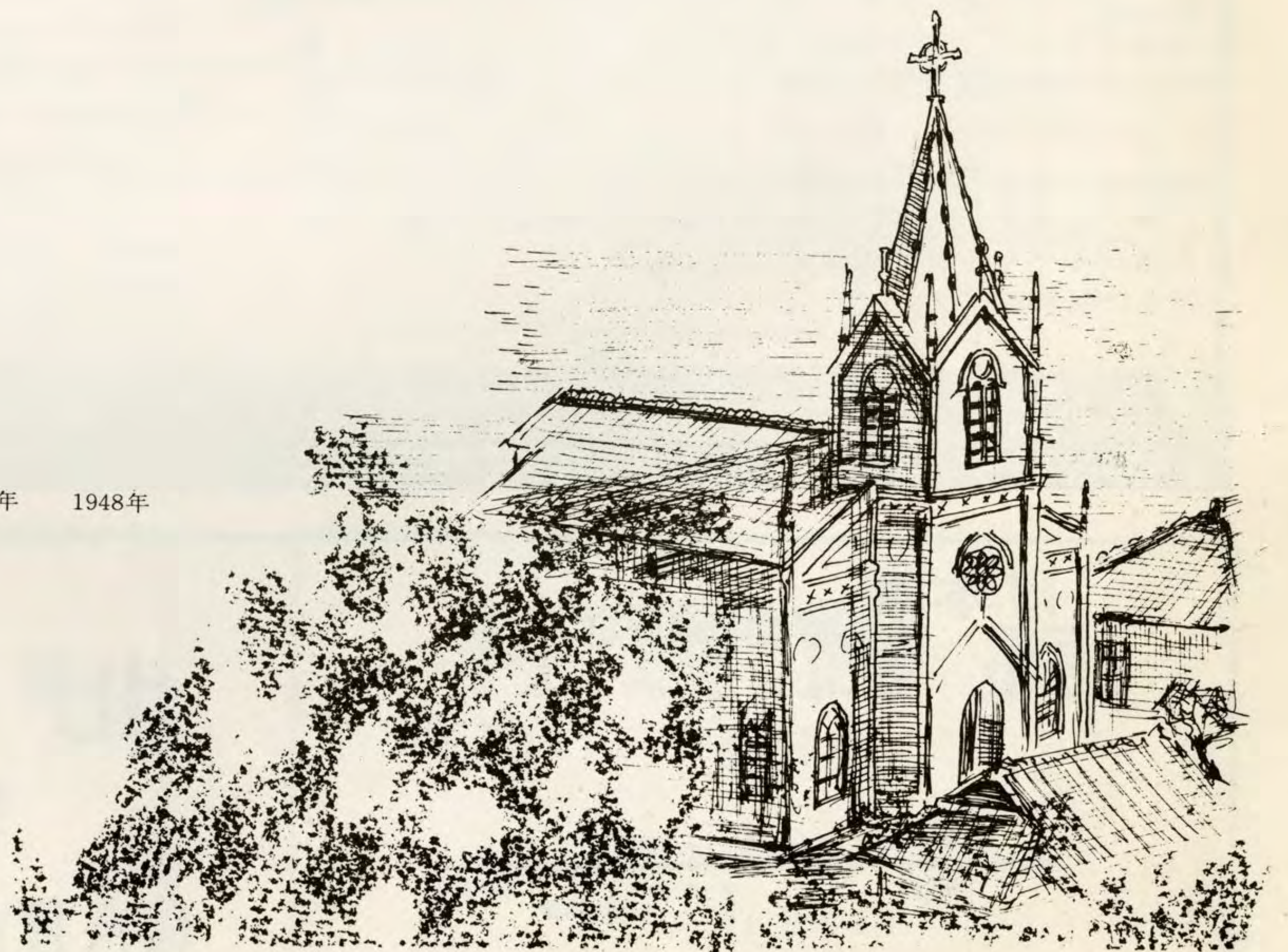
そのとき妻は魚屋の前に立ち
 一九四八年の暮れのなかで
 さんまのひらきなど見てゐた

一九四八年 1948年

浅 春

一匹の蠅が傍の畳に小さく黒くちっと動かない
 其処にぼんやり灯った燈下の下に私がゐる
 さて戸外には春暖もよほしたか
 童ら頻りに遊ぶ^{わらべ}
 足音ら多く行き交ふ
 蠅と私はそれらの物音を耳を澄まして聞いてゐる
 すると 今蠅がちょっと動いたので
 私の部屋の風景はやゝ変り
 外にもにはかに黒い風が吹きはじめ
 おどろおどろしく何処かの工場の汽笛が鳴って
 いつの間にやら童らも散ったか
 遠くで童の声がひとつばかり
 風に吹かれ吹かれて
 ゆれながら
 やがて消えた

一九四七年 1947年



ひりて ふたりて

あるオンナのこ

私「ネェ、『彫刻』好き。」

友「チョコク？ そんなもの食べたことないわ。」

私「バカネ、『彫刻』知らないの？」

友「ア、解った。『考える人』ね。あんなの作る人ってクマみたいなんじゃないかしら。」

彫刻家といえども女性も女性、決してクマなんかではありません。たくましき男どもに囲まれながらも、なお、ひかえめに咲き誇る一株のタンポポちゃん。だからといって甘く見られるほど、しゃくにさわることはない。どんなことに対しても男どもに負けじと、歯をくいしばって頑張る。そのいじらしさたるや涙にも値するのでは。

世の中には、自分の好きな道に進めず、他人の為に働き、生活に追いまくられて、自分を見つめる時間もない人が大勢いるというのに。大変申し訳ない毎日である。

たとえ、「どうせ遊びなんだろう。」と言われようが、「東京のゴミの山を大きくする手伝いをしているの？」と言われようが、いいではありませんか。自然保護が叫ばれている今日、彫る毎にすべての木や石が失敗作になっていくのだから、無理もないと思われるし、実際、もっともらしい理屈をこねまわしているだけかもしれません。しかし、私達には若さがあります。これこそ、何にもまさる特権です。甘いかな？ でも、大いに恋をし、大いに製作に励み、有難い、有難い毎日を送らせてもらおうではありませんか。

若さに乾杯！！！！

あるオトコのこ

ある休日、珍らしくスケッチブック片手に公園へ足を運ぶ。楽しそうなグループ、木陰で憩う老人、はしゃぎ回るお坊ちゃん、お嬢ちゃん、それらの人々をニコニコながめながら、足はなんとなく人影の少ない所へと向って行く。仲むつまじいアベックなぞに出会うとなおさら、そのような傾向が強まるようである。（なぜか、内心はうらやましく思いながらも「あっしにはかわりのない事でござんす！」てな顔をして、ムリヤリ意地を張ったりする可愛らしさ？）あたりをキョロキョロ見回して、唯もないことを知ると、ようやく元気を取りもどして、「こういう環境こそ自分にぴったりの雰囲気」と満足する。おもむろに鉛筆など取り出して、思うがままに画面にいどむ。やがて時間はたち、画面は？と見れば、ただ黒さを増すばかり。我ながら不満をいだきつつも、「ボクは彫刻科だから。」となくさめる。気がつけば、回りは見物人でいっぱい。あわててかくそうとしたが、時すでにおそし。一人のじいさんが笑いながら寄ってきて「元気じゃのう。ご趣味ですか？」ときた。力なく答えた。「エエ、マアそのようなものです。エヘヘ……」

早々に引きあげた。家で寝てりゃよかった。

さて、翌日、まるで昨日は何事もなかったような顔で、いつものごとく元気に登校する。芸大はいいねえ。まさに天国のような所で、世間の冷たい目はいっさい、あったかい目に代ってしまう。中でも、さっそうと肩で風切るスペシャル土方。我々彫刻科の男子は、その恵まれた体力と行動力にものを言わせ、素朴と人の好きで頑張っている。乞食でも捨てるような布きれを身にまとい、回りが、いやな顔をしようが、「きったないわねー」とばかにしようと、いっこうに気にとめず、ひたすら木に石に土に情熱を燃し続ける。愛すべき人間である。

日本画 常設画廊
洋画

北 辰 画 廊

東京都中央区銀座6丁目9番地の13
TEL 573-4256~7番

銀座四丁目
●三愛
松坂屋
ボールスタービル
北辰画廊●
至新橋

GARALY HOKUSHIN

TEL (571) 2 8 8 0

上野公園雑感

4年 石松 豊秋

上野公園の朝方は都会から離れた空気を感じさせる。好天の日など、西洋美術館の彫刻も強い空間性を明示してくれるし、国立博物館の屋根の稜線の美しさを見るのもひとつの楽しみで、たまにハトが数羽止って邪魔をする場合もあるが、雄大な気分を味合わせてくれる。犬をつれて散歩する人、毎朝ランニングをしている老人、老人というのは失礼かもしれないが、私から見れば“よくやるよ”と言いたくなるほど頑張っている。それと対称的なのが、上野公園名物の乞食である。“ノンビリ行こうよ”と言うのは分かるが、でも、もう少し精神構造の高さを示して欲しいな。人の話によると、乞食でも階級のようなものがあるそうで、乞食は乞食でプライドというものがあるらしい。我々が話しかけても、結構理論家も居るそうで、歯が立たない場合があるとのこと。外見では分からないものだ。

昼頃になると、動物園があるためか、親子づれが多くなるのも上野公園の特色である。ハトと戯れる親子、いや反対にハトに戯れられている感もなきにしもあらず。歩き始めた子供を見るのも楽しい。よく見ていると、ハトの歩き方と子供の歩き方が似ているように思える。結構チャーミングである。

上野公園には東北から来た人達が多く、お国訛りがこれまた楽しい。非常に健康的である。一度可愛い娘ちゃんに話しかけて見るべと思ひながら勇気出ず、なぜならば痴漢と間違われること確実だ。

上野公園のはずれに東京芸大がある。我々の生活が在る。一般個々の人生模様があると同様、物を創造する人達の生活が在る。感覚的な人間が多いためか、喜怒哀楽がこれほど大きな差を持って同居する所も少ないでしょう。それだけに、現代の思潮の中で試行錯誤しながら、純粹に生きているように私には思える。

上野公園の夕方は美しい。色とりどりの噴水とアベックのシルエットは格別である。何度見ても飽きることがない。別

に私が色情狂だとは思えないが、ひとつの静かきの余韻と暖かみを感じるのである。学校の帰途、友人達と“人類生存のために頑張るとるな”などと言ってお互いに顔を見合わせ、ちょっぴり淋しくなるのも上野公園雑感である。

一年 浜崎 茂

光は空気を、あわれなお前の脚を断ち切った時<幾月幾夜の熱病の後に>……私は……ああ、ついに夢がかなう。黒いスーツの哀れな女を抱きしめるのだと、はかなき愛を前歯にはさみ、赤い花の生けられた町角をさまよった。あれらの町は、なんと十分に腐っていたことか。

オント、オント

オント！ オント

やい、盗人め、告白はお前の去勢された意識、折り曲げられたうすっぺらの紙は、日射にうちのめされているではないか。肉厚の、日射にたたきつけられひしゃいだ緑葉は、繁みの熱とともに燃えあがり、そして地表へと押しひらかれている。

オント、オント！ オント！

オント！ オント、オント

直線に繋がれた防波堤、四角に裁断された窓、ロココの脚流れでるアスファルトの歩道と……銀色に沸騰する大気の中で、お前達は私を残して昇天した。銀色に沸騰する大気の中で、私は……幅広の葉の暗黒に裏打ちされた意識よ……

お前の顔にナイフを突きたてて……恥！



石井三柳堂画廊

——洋画常設——

——日本画常設——

東京都中央区銀座1-8-15

TEL (563) 3251 (代表)

心得

二年 萩原 清光

神は、その意志を行う為に人を造った。人は、鋭い爪も牙も、争いの為の物は一つも無く、神の物である良心の秤と、智恵と、そして愛を与えられた。それは、この世の全ての物と共に和し、共に喜び、共に栄えるように造られたからだ。作家である以前に人である以上、この、人の使命を忘れてはならない。

人は肉体と精神、つまり心を持つ。肉体は食物によって潤され、心は真と善と美とそして愛によって潤される。動物にも優れた肉体はある。人の尊厳は、その心の偉大さにある。それは神の物だからだ。百姓は肉体を潤す為に生かされる。作家は心を潤す為に生かされる。

作家に限らず、あらゆる人の創造行為は、神が造られた如く、愛に満ち、真と善と美でなくてはならない。作家が物を造る時、それが愛に導かれた良心と智恵の所産でない限り、その作品はわざわざあり、いかにこの世で心ない評論家をわかせても、彼は神のもとにおいて不遇である。

真に真の造形とは、荒廃した人の心にも、良心と愛の使命を呼びさますほどのものである。しかし、今、自分の産み出せる形は、そうであるのに、あまりに微力であることを痛感する。

思い出

二年 百瀬啓一郎

ただひとり、ポプラの木のもとにたたずんでいる。青い葉っぱの帽子をかぶった太い樹は、巨人の国の大きなキノコのように、そして僕はおとぎの国のガリバーのよう。

黄色の太陽は、さんさんと輝き緑色の空に純白の雲が、河を流れる泡のようにゆっくりと流れる。まるで河の流れの中にいるよう。

それは小学校の思い出。

ただひとり、桜の若木のもとにたたずんでいる。ふくらんできた小さな青い芽は処女の息吹き、その木々の中に立つとまるで処女に囲まれている小人のよう。

白い太陽はサラサラとした光をなげかけ、青インクを流したぬけるような空、ぽっかりと浮んだ純白の丸い雲、まるで子供の頃の綿菓子のように。

それは中学校の思い出。

ただひとり、イチョウの木のもとにたたずんでいる。大空高くのびる樹は天の柱、黄金色の枝はナイトのやり。

藍色のインクを流した天井のような空、まっかな太陽は網のような枝を通りゆがみ、大きくなったり小さくなったり、山端にただよう黄色い雲、まるで細い細い糸のつながりのよう。

それは高校の思い出。

ただひとり、けやきの木のもとにたたずんでいる。不気味にふくらんだコブは灰色の入道雲の兄弟、象の頭。枯れた枝はコーモリの手、ブロンズ色の空に黒い太陽が皆既日食のような重い光をなげかけ、鉛のような雲はたれさがるグレーのカーテンのよう。

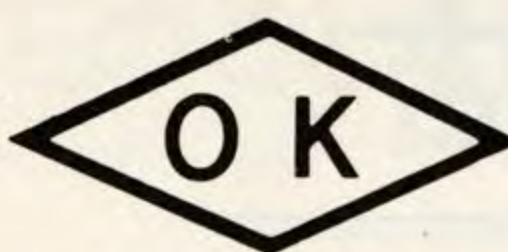
それは浪人の思い出。

ただひとり、真夏の強い日差しの午後、小学校の前をとおり。白いズボンをはいたみんなは体操の時間、四角い庭の小さなすみに黒いズボンをはいた青白い顔の少年、みんなとはなれ、なにかの木のもとにたたずんでボンヤリ空を眺めながら、野草をかんでいる。

まっさおな空には流れるでもなく、消えるでもなく、ポッカリただひとつの雲。

それはきのうの思い出。

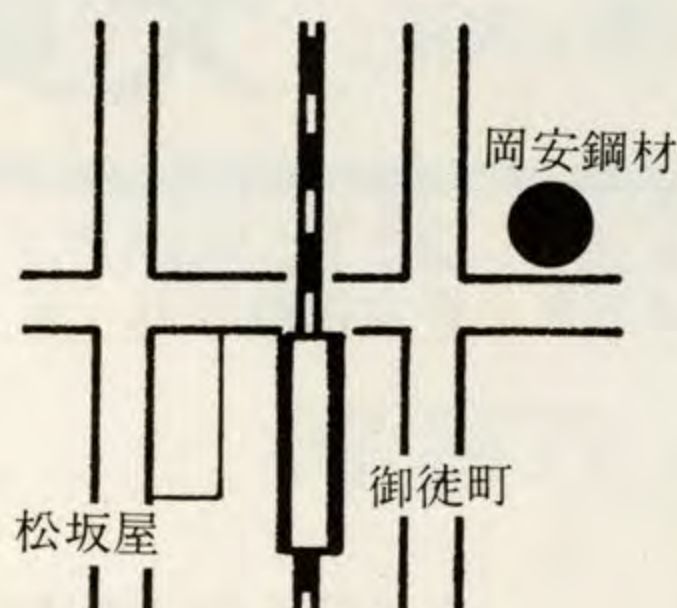
イゲタロイ
タンガロイ



石工用
工具

岡安鋼材(株)

台東区東上野1-12-2
TEL (834) 2321-4



彫刻の森美術館

箱根・二の平
箱根登山鉄道

彫刻の森駅下車

〈現代イタリア彫刻の全貌〉展
SCULTORI ITALIANI CONTEMPORANEI

11月30日(木)まで



THE HAKONE OPEN-AIR MUSEUM

二年 久保田和子

言葉の曖昧さとそれ以上に曖昧な人間の思考、そう、見方とでも言いましょうか、そんなことを考えてみたわけです。言葉を信じない人もいます。話していてもほんとうのものは言葉とはならないものなのでありましょうか。ただ表現の面白さで消えてしまいますね。

そう、それがオシャベリというものでしょうか。

言葉を信じているあいだは、人間のことが解らないと言う人もいます。しかし、私達にテレパシーが出来ないかぎり（本当はだれでも出来るのだけれど）言葉に頼るしかないのです。そして、言葉をより完璧にするために努力するしかないわけです。

文字、それは言葉の化石です。汲まれたつぼの中の泉の水です。絵の具の一色です。それらをつかって絵画のように文学が生まれる。そして詩人は言葉の錬金術師なのです。点描の様に純な色としての一音一音を作る、その為にあらゆる言葉の中の常識の衣をはぎ取るのです。そこにつづれ織りのように織り込まれた世界が広がるのです、言葉の。

人間が一人でもないかぎり、他者に見られるということが起って来ます。女の子達は見られることを覚え、そして見ることを忘れていきます。そして女らしいと言われるようになるのです。

本当の言葉が音声の言葉となりえないように、見る、真実見るということも目では見きれないのです。そして生きる以上、見る事がまず必要です。しかしこの世にはなんと盲人と失語症患者が多いことでしょう。

女性週間誌が毎週各社から何冊も出され、女性達の目のかわりをしている風を装い、多くの人々の見る力を弱めて行くのです。人々は又、見える事を信じすぎています。私なども視力が2.0で、なんでもはっきりと見えるのですが、実は何も見てはいないのです。

人々は一般的見え方のラインで見ているものにもう安心してしまっています。本当はそれが一番怖いことでもあります

のに。

悩んでいたり、悲しんだり、又は激しくおこっていたり、あるいははしゃぎすぎている時、視界とか見える範囲が前方だけで、いつものように180°は見えないということを経験したことは誰にでもあるでしょう。

人間は感情の動物でありますので、おうおうにしてよく過ちを犯します。ただでさえ見えない目なのですから。それが思考に大きく作用します。なにごとかいわんやです。いつも見る立場、見者となって、少しでもよく見えるようになりたいものです。

一言

二年 村田妙子

中身はさておき、器について一言。彫刻科の建物が、私は気に入らないのです。もうドカンと建ってしまったものは、今さら、大地震か戦争でもなければ、壊れそうにないけれど、あれが自然に古びて、役に立たなくなつて、また新らしく建てかえる時の参考にでもなればと思うのです。もちろん、それは、十年から数十年先のことでしょうから、その時の新しい建築家のセンスに任されるでしょうけれど。

なぜ、総勢120名以上が、一つの建物におさまらなければならないのか、疑問です。そう思ってしまうのは、廊下を歩いている時です。ざっと5・60メートルはありそうな長い廊下の両側にずらっと並ぶ全学生のアトリエのすべて同じ内部のつくり、同じドアに何か言いようのない不安を感じるのです。何だかわからないけれど、索漠としたこの大きな建物の中の雰囲気、とても耐えるべきものではないと、一番初めは感じたはずなのに、一年余りたった今では、すっかり我慢出来るのです。それはたぶん、よく思えて来たからではなく、慣

彌生画廊

小 川 敏 夫

東京都中央区銀座7-6-19

(並木通)

TEL (571) 3220(代)

東京都中央区銀座6-3-2

(ギャラリーセンタービル4階)

TEL (571) 7236

(有) 大吉

大貫商店

マキタ・日立電動工具 大工道具・左官道具 高級刃物・工具

東京都文京区根津2-20-4 TEL (823) 2323

れてしまい、感じなくなって、抵抗することを止めてしまったからでしょう。そして、ますますどんどんそうやって行きそうなことに対して、恐怖と腹立ちを覚えます。全面的に建物が悪いのではないかもしれないけれど、でもせめて建物だけでも、もう少し血の通った優しさにあふれたものだったらと思うのです。そして、いつどこに彫刻が置いてあっても似合うような。

二年 宮沢清日子

休みを終えた学生が、遊び疲れと夏バテで、お昼の休みに公園の、ベンチで昼寝をしてました。いびきをかきかきみた夢は、花咲き鳥鳴くパラダイス。悩みなんぞはまるでなく、食べて遊んで昼寝して……楽しいおとぎの国でした。われ思うに、夢とは心の底にある、あこがれなりやかと……

いとおもしろき顔をもちたる男の子

はじめて恋をしりそめて、夢にうつつに、まぼろしに、ふくよかな乙女の姿想いつつ悩み暮らせしは、われまだ幼かりし頃のことなりき。そもわれの恋せし乙女子は、黒きリボンのよく似合う、もの静かなるものにして、色はしろじろ、目パッチリ、大きな口もと愛らしく、クレオパトラも楊貴妃も相手にならざるうるわしさ。春風そよぐ木の下で、初めて彼女と語らいぬ。彼女はボクに首ったけ、「あなたの為ならどこまでもいっしょについて行きたいわ!」言われてボクも有頂天、うれしく思い、抱き寄せて、熱き口づけ……と思ひしその瞬間、乙女の姿は消え失せぬ。

夢より覚めしわがそばで「ミンミン」セミの笑い声、この悲しみこの嘆き、くやし涙に泣きぬれて、われ胸にかたく誓ひしは、『仕事の鬼』になることただ一つ。真偽のほどは、はなはだ疑わし。

日暮里の貴公子

二年 田中 毅

今日が来た。明日も来るでしょう。俺は日一日と頭がぼやけて来る。芸術家は俺です。もうあと一日立てば死ぬと言われても急ぐまい。したいことをしているから。世の中に純粋な奴などいないんだ。俺には全部ひねくれてみえる。それでいいのだ。＊ ● ▲ ■ 𠂇 ◎ 俺は巨匠になる。

天才が駄目だったから。展覧会など行かなくたって、いいものは作れる。日本は展覧会が多すぎる。展覧会、画廊を廻って、もし芸術を知った、あるいは親しんでると思っているとしたらまちがいだ。しかしこう断定はしないが、芸術、それは創る喜びである。制作中に自己の存在を知る。作っていて今、俺は生きている、今作っているのだ、こういう実感が沸いてきたとき、俺の作品は大幅な進歩をとげる。俺の試みは、やらない。もしそれが試みだとすれば、自分にとって、試みではなく、自然のまま、知らぬまま作ったものであろう。しょってる——。⊖ ● ＊ ○ ◎ 芸術家であれば自殺しないんだって。自殺に悩んでる人、芸術家におなりなさい。おれは馬鹿だって？ まさしくそうであるかも知れない。だって、阿Qを好きだから。解説、阿Qとは阿Q正伝で魯迅のかいたもの、中国風に読むとルーシェンだったかな？

解説終。近頃写真家が動きだした。今写真は芸術の中にはいつてきている。写真は油絵より、もしかしていいのじゃないかなという感じもする。皆さん、田中毅って知っていますか？ 知ってる。そうです。それが私なのです。皆さん俺を軽蔑して下さい。そうすれば、俺の上に立てる。しかし、おれは君を軽蔑する。こんなものを読んでる君を。● >
< mf f p c Em 喜んで下さい。今日も生きていることを。君も僕も人間の世界を、今日も味わえたのです。もう馬鹿らしくなった。

石のことなら、なんでも

有限会社 田 中 石 材 店

専務取締役 田中松蔵

オレの魂

二年 井上富美男

今のみほした Coca-Cola
緑の空びんその中へ
ギュッとばかりに押し込んだ

川の流れに まかせ まかせて
緑に染った オレの魂
光の中を遠く往って

激しい 息づかいで立つオレの
気のぬけた Coca-Cola
腹の中で シャボンシャッポン
シャッポン シャッポン
名前を忘れた昔の遊び
「あの娘が欲しい この子が欲しい」

流れ流れの Coca-Cola
風の便りにコカコーラ
太平洋の海原で

オレの魂 眠るとか

たゆり たゆーりと眠るとか

僕はやたらにデカイものが好きな人なのであります。
デカイ空。そう、観念的な大きさではなく、
見わたす視界の広い空。
あたりの一番高い山を見つけて、登って試みれば、
それが一番 デカイ空。
ノミは人にたかるのでして、私も山にたかっているの
でした。

大きな事は、唯、それだけの意味しかもってはいない。
しかし、それだけの意味は、確かにもっている。
小さな者の悲しみと愛とをこめて
私は
大きなものへの憧れと、闘いの意欲を握りしめる。

目、表情

二年 新庄貞嗣

去年、駱駝を粘土で造ったところ、駱駝が僕に似ていると
か、僕が駱駝に似ているとか言う人がいて、俺ってあんなの
に似ているものかと憤慨しつつも冬には駱駝色のランチコー
トなどを着たりしていたのです。でも僕はあの目が気に入っ
たのです。開いているとも閉じているともはっきりしない、
どこを見ているともわからない目。この世の中におもしろい
事なんてあるの？……てな表情、よく見ると哀しんでいるよ
うにも見えるあの表情、あれがいいのです。ライオンやトラ
の鋭い、射るような目も悪くないんですが……でも
やっぱりなんていったって一番好きなのは、ぱっちりした女
性の目なんですけど……

——動物園に行かれる方へ。

文頭の似ている似ていないの部分は、駱駝のオリの前では
絶対にお話しにならぬようにお願い致します。駱駝が気を悪
くすると困りますので。作者は昨年頻繁にオリの前を訪れて
おりますゆえ、駱駝とは顔なじみなのです。

(飼育係よりの注意)

——最後に駱駝様へ

お互いに多少のプライドがありますので、似ている、いな
いの話は無視したいと思いますがいかがでしょう。

(作者より)



日本橋画廊

児島徹郎

中央区日本橋通3-1 TEL. 271-5995・8626

油絵；島内ミキ 宮崎進 小原稔 福井良之介 大歳克衛 田島英昭
岡野浩二 高井寛二 小川以久男 菅谷秀雄 五百住乙 和田徹
渡部慧 恵俊彦 平田勝規 彫刻；堀口泰造 広瀬和子 峰孝
淀井敏夫 桜井祐一 中村直人

九十年の伝統を誇る

宗意の彫刻刀

台東区東上野3-37-9

TEL 831-2636

あ でい いん ざ らいふ

一年 深井 隆

〔自己批判〕私はなんとまあ純真で、生真面目で、堅物で、おりこうさんなんでしょう。いやはや、いやになってしまうのでございます。

満足は他人を軽蔑すれば生まれるのでしょうかねえ。そうだったら、私はすべての他人を軽蔑いたします。元気ですか。こちらは疲れていますが、やる気が体の中をはいずりまわっているのでございます。ええ。

歴史という大きな移行する力は、個の力ではどうすることもできないような気がする。人はその浪にもまれ、のたうちまわりそして死ぬのだ。昨日から私のおつむはいかれだし、失敗ばかりやってのけます。なんとなく不愉快です。悪い結果が、からまわりして、心から飛び出していきますので。

何に対しても喜びを見い出せない、何をやってもそれは結局無に還元されるだけだ。という意識が、私の体を食いつくす。生きていく価値はどう考えてもない。しかし、死ぬ必要もない。私は今、虚脱感におそわれている。人類の愚かしさは性につながるようにも思われるのでございます。

俺は、何も知らない人間になりたい。何も知らないで人生をまっとうしたい。虚無と偽善の世の中には、それがいちばんの方法だと思うのですよ。とって、私は何をしたらいいのでしょうか。全くわかりません。

この世は虚であるか？ はい、この世は虚でありましょう。しかし、この世を虚と感じていない人もありますよ。と、あなたはおっしゃられますが、虚と感じない人、すなわち、その人は虚の部分なんですよ。さて、階段は上へ上へとのびているのでしょうか。あるいは下へ下へとのびているのでしょうか。11階建のビルディングの階段で、ふと考えました。

やどかりが死にました。海でとってきて3日目です。宿の中から体をのりだして死んでしまいました。小さな洗面器は、ちょっと住み心地が悪かったのでございましょうね。かわいそうなことをいたしました。

大切なことは、自分が流されているか否か、あるいは、自

分が信じているものが、はたして本当に真実なのかという問題です。サイコロは、一から六までしかふれませんが、人は少数点から無限までふれるんでしょうね。だれか、すばらしいつぼふりがいないでしょうか。

今日、新宿へ行って靴を買ってこようと思います。

一年 村田 徹

おれは、彫刻を造りたい。なぜか。それはおれの内にあるものを、外に表わしたいからだ。何かのイメージがある。そうすると、おれはそれを造りたくなる。なぜ造りたくなるのか。おれには解らない。ただ造りたいから造るのだ。それ以外の何物もない。それが芸術かどうかそんなこともどうでもいいことだ。造ってしまえばそれでいい。ただおれは自分の思った所をどこまで表現できたかを考える。おれの内にあるイメージをいかにして、より完全に表わすか。もっと強く表わすにはどうすればよいのか。それがおれの第一の関心事だ。

彫刻において重要なものは、存在、動き、生命だ。おれはこう思っている。なぜなら自然がそうだからだ。山、川、木、動物、なんでもそうだ。たとえば、木、そこには存在感がある。大地に根を張り、周囲の空気をおしのけて、しっかりと立っている。冬になると、葉は一枚もなくなり、いかにも寒々としている。しかし木は、生命を保ち、春をじっと待っている。雪原のあのポプラ、素晴らしい力を感じる。そう、自然は動いている。刻々と変化しているのだ。そして、そこにはむりな所は一つもない。彫刻もそうあるべきだ。確かな量があり、それがむりなく動いている。そして生命がある。それこそ存在だ。彫刻だ。おれは造りたい。自然な彫刻を。

南天子画廊

東京店：東京都中央区京橋3-11

TEL 03 (563) 3511

大阪店：大阪市東区道修町4-6-1 新芝川ビル1階

TEL 06 (226) 0383

福岡店：福岡市中央区天神4-4-11 福岡ショッピング

TEL 092 (72) 5411

養清堂画廊

YOSEIDO・GALLERY

阿部雄治

東京・銀座5の5の15(並木通り)

TEL (571) 1312・2471

雲

一年 富木昌子

どこまでも唯すみきった青しか見えない空を、砂浜にねそべって眺めながら、私の考えているのは一雲一のことだった。病院の窓から見たあの気持ちのよさそうな「おっちゃんとおばはん」のことは、一年もたった今ではとんと思い出すことではなかったのに、小さかった昔のガラガラ音のように、何故かなつかしく思われていた。

あの一月近い病院生活も、実になさけない心持ちで終わろうとしていたある日だった。外はよく晴れわたって、元気ならば気持ちよい水しぶきをあげているだろう様な暑い午後、私の目はじっと動いてゆく入道雲を見つめていた。それはみんな人間の顔だった。町の中に埋ずもれている生活のある人間だった。誰も主張していなかった。そして誰も問い詰める様子はなかった。自分一人をしっかり守って一瞬にして消え去っていった。「おっちゃんとおばはん」の二人連れも、まさに人間そのものの顔だったのだ。だが、一つちがっていたのは、お互いに包みあうような暖かさをもって二人並んで消えていったことだった。一瞬の出会いで、もうずっと古くから、かれらを知っているような気がした。それは多分、おっちゃんとおばはんが知り合った時からのことだろうか。そう確かに、ずっと昔のことではよくは覚えていないが、あの二人に連れられた小さな女の子がいたと思う。しかし、どうやらその子も大きくなってすでに一人流れ去っていったようだ。それでもやはり、あとになった二人は、静かに、だが実に、強さを残して姿を消していった。

退院するときには、あの「おっちゃんとおばはん」の強さが、妙に心に焼きついていて、そして私も町にもどったのだった。

雲ひとつない空を眺めていると——あの雲は何だったのだろう——という深い疑惑にとりつかれたのかもしれない。実際、澄みきった空など、めったに見られるものではないのだから。

二年 黒田幸治

私はベンチに腰をおろしていた。時計を見ると一時を少し過ぎたところだった。あたりには人影もまばらに、岸に打ちよせる波の音だけが林の中に伝わって来る。私は林をぬけて行き、湖岸に立った。湖面を渡ってくる風は意外に冷たく、今朝方まで降り続いた雨の名残りの雲が日の光をさえぎり、湖の色は重くしずんだ色をしていた。ふりあおいで見る男体山もその頂を雲の上にかくしていた。岸の石垣にあたる空カンの乾いた音が時おり聞えこくる。

私は煙草に火をつけて、林の中をぬけ、旅館や土産物屋が建ち並んでいる通りを、バス停の方へ歩いて行った。家々のひさしの下に巣を作っているツバメが、時おりせわしげに鳴きながら路をかすめて行く。

発着所の中には、すでに20人位の人が発車を待って並んでいた。自分も切符を買い、その後について立った。人々の話し声も騒がしく、ここだけは観光地らしく賑やかだった。スピーカーからは、森進一の歌が流れている。やがてバスが入ってきて列が動き始めた。後から来た老夫婦が車掌にバスの行先を聞いている。私は乗車して、後の方の座席にすわった。先程の老夫婦も乗り込んできて、すぐ横の席にすわった。バスが発車した時には50程の座席はほとんどいっぱいになった。

バスは日光駅まで直通で走った。いろは坂の幾つものカーブをバスはその大きい車体を器用に回してすりぬけて走った。車体が右に左に傾く度に、子供達のはしゃぎ声があがる。下の方には幾重にも折重なった坂道が見える。運転手がいそがしくハンドルを回している。

ふと、横の席に居る老人の言葉が耳に入ってきた。「おい、お前大丈夫か。」どうも夫人が車に酔ったらしい。夫人は目をつむって夫の胸によりかかっている。老人は手を夫人の背に回して、子供を寝かしつける母親がするように軽く肩をたたいてやっている。老人は、また何か言った。夫人は微かにうなづいた。

赤木石膏像研究所

〒113 東京都文京区本駒込4-6-5 電話(321)1831

新宿工房 責任者 小川繁 東京都新宿区柏木3-380

柏工房 責任者 大里八郎 千葉県柏市名戸ヶ谷字北割17-26

倉庫 千葉県松戸市千駄堀字稻荷1073

彫塑用廻転台、及び心棒

彫塑器具一式

株式会社 竹内製作所

東京都荒川区西日暮里2-7-12

電話(891)1728・1836番

帰りの電車も同じだったらしいが、どこに乗ったのか、どこで降りたのか気付かなかった。

ホームに降りると夕焼け空だった。

見えない何か

二年 安倍和子

一通の点字の手紙を受けとった。私の点訳書を読んだという文面だったが、眼あきにない何かを感じた。

「あなたのランプの灯をいま少し高くかかげて下さい。恵まれぬ人達の行手を照らすために。」というヘレン・ケラーの言葉にはほど遠いが、たった5冊の点訳書を完成したことが、暗いじとじとした所から私の精神を明るい方向へ乗り越えさせてくれたことを思い出す。

盲人は見えないけれど、眼あきにない見え方をもっているのかもしれない。我々はいつも、モノを何の気なしに眼に映して、本当は何も見えていないのに見えていると思い込んでいる。ただ見ているだけであり、「チラと眺めている」だけなのであって、心の中からの行為としての「熟視する」が欠けている。ひょっとすると盲人の方が何か見えているのではないか。

能の面の中に景清というのがある。盲目の面であるが、目が横に長く切れているため、普通の面より演者の視界が広くなるという皮肉が生ずる。シテは見えているのに盲目を演ずる。盲目の精神を演ずるのだから見えようが見えまいが重要ではないのだろうか。シテが面をかけることによってしてしまうのだが、その力量によって面が形骸で終わるか否かは決まる。形骸としての面にはそれだけでは何の感情もない。演者によって初めて、感情が入り込み、演者の解決によって生き者となる。面の中に隠れて含まれているものが引き出されるのである。能ではこのように眼に見えない状態から何かを引き出そうとしている。現実には舞台上に見えているものは問題ではないのである。

能の観客は能面の表は見ているが、裏は見えない。シテは鏡の間に装束を整え、最後に面をかける。シテの面との問答、面への精神の吹き込みが終わり、裏に反してかける。この時、裏のシテに対する訴えかけは強烈だと思う。裏は単に顔にあわせるために刳貫かれているのではなく、そこに能の曲全体の凝縮がある。能面作家はこの凝縮のために面を打つ。

ここでモノに対する自分の見方を疑ってみる必要がある。既成の概念に囚れているのではないか。手を眺めれば指は5本ある。しかし、眼からモノを経て自分のものとして熟したとき、モノである手には4本の指しかないかもしれないし、たった1本で足りるのかもしれない。見ていないところに何かがある。眼に見えないところにある「何か」を重要視し、捜して行かねばならない。

大都会の一隅、ある夏の夜のこと。

年 金城靖子

やっちゃん、きのうやもりをみた。真夜中の12時頃、母屋の風呂をつかって離れに帰ってから。流しの脇の上の所に、濡れたタオルを架けようとしたら、その棒にヤツがしがみついていたらしい。タオルを拵げながら架けていたら、少し抵抗を感じた。タオルが濡れているせいと無意識に感じて指先の力を入れた、途端、ピューンと半弧を描いて何かしら流し台の中へとんだ。思いがけなかったので、一瞬今あったのは本当かな？ 今何もなかったんではなかろうかと思った。何か大きなしずくがとんだ様な気がする。そんな音が流し台の上で起きた様だ。暗い流し台の中を湯上りのポツとした眼でみてみた。チョットの間を置いて、左手前のスノコの上にみつけた。白っぽい、グレイっぽい、水っぽい感じのヤツが、体を後足の部分からチッと曲げて、四ツ足でハイツクバッテ、姿勢をうかがっている。

ウァァァ、イマダ……。体の芯が微かに痺れた。シッ。別に害があるわけではないから無視しちゃおうかな。でも、ヤ

粘

彫塑用、テラコッタ用、陶芸用
教材用 各種粘土 製造販売
陶芸用 各種窯 } 製造販売
陶芸用品 一切 }

土

有限会社

高橋粘土店

東京都北区田端町 220-1

電話 (821) 5 8 1 6 , (828) 5 2 7 8 ・ 5 2 7 9

東京でのお泊りは…交通便利な上野で！

＊客室105室

シングル¥2,500・ツイン¥4,600より

上野ステーションホテル

東京都台東区上野2-14-23 TEL 03(833)5111

ツと一晚同居するの感心しないな。電燈消したあとでそこらをウロウロされるのうれしくないな。なにしろ、この離れは六丈一間一戸建てで、そこに流しの部分がチョコッと張りだしているだけだから、台所の戸をしめちゃえば平気ッという訳にはいかない。台所兼、食堂兼、居間兼、寝室兼、客間兼、書斎兼、バルコニー兼、物置なので。

近々、連絡室にもなる予定だ。電話が入るから。〇〇〇ー五三二八番。意外に早くつくもんだね。昨日申込んで、一週間目につく。でもやっちゃん電話なんて欲しくないんだ。電話まで引いては、なんだか妙に落ち着いちゃう感じだもんね。本意にはあらず。だけどまあ、つけることにした。月々の生活費プラス 950円也。音量調節器付きなので、基本料金が普通のより月々50円高い。母屋の奥さんが、「貴女もこれでイヨイヨ一人前ネッ。」と、ニコニコ激励してくれたけど、チットモ。母屋は呼び出しの手間がはぶけてうれしいでしょうが、こっちは電話引く必要全然感じてない。傍若無人に他人の時間に割り込んでくるあのベルには、恐怖と嫌悪感を抱いている。この6畳間にそんなもの抱え込むなんて、想っただけでやになる。でもまあ付く。玄関（半畳の）に置くか、机の上に乗せるか思案中だ。

何ンの話しだッ？ ゴキブリの様にタタキ殺す気にはならない。この辺り、池袋駅の周辺には、もうとうに絶えているのかと思っていたのが御出現。しかも家を守るとの言い伝えあり。母屋に風呂をもらいに行っている間、ズーツと離れを守っていてくれたのかな。沖縄のやもりは屋内にいて、明瞭な発声で鳴く。沖縄の人はやもりとの同居を一向に苦にしない。あの人達はやもりに同居人としての資格を認めている。

サテ、ここは沖縄ではないしヤツは鳴かない。まず最初に、ヤカンの水をヤツがモグリ込んだスノコの上からザーザーかけて、下水へ流してしまおうと試みた。水をかけてもかけてもスノコの下から姿をみせない。スノコをソーツと持ち上げてみると、ヤツはスノコの側に密着していた。スノコを持ち上げる。流し台の方へ飛ぶ。次の手は、窓の外へポイッと。

それで流しの向こうのガラス戸を一杯に開けて、ヤツを追ったが、かなり敏捷、直接こちらの手や顔にとび移られたらどうしようと思っているので、一向捕まらない。そこでチリトリをもち出し、乗せて窓の外へと考え、試みていると、隣りの男の子が友達を2人程連れて御帰宅らしい。酒気をおびた声が近づき前を通って、戸をガタピシいわせて明りがつく。窓々が開け放たれて、蛍光灯、ベビータンス、テレビ、ファンシーケース、そういったものがハッキリみえて、話し声が聞えてくる。とはいってももののやっちゃん、視線はやもりに釘付けだから、お隣の光景は、一瞬、目の角にでも入ったのだろう。頭の中は隣りの人の帰宅ゆえ、流し台の向こうにやもりをポイはまずいな。（隣に向って投げる事になる。）とらまえて玄関から外に離そうと方針を変える。ソーツと玄関のカギを開けにいく。チリトリにやもりを乗せても、しばらく乗っててもらわないと、道程が長くなるので、途中下車は困るのだ。押入れの方やら、冷蔵庫の下、新聞の間、ハタマタトイレに入っちゃったら具合悪い。ウン、ンッ。そうだ、あれでいこう。チョイとバッチィけど、やっちゃん思いついた。チリトリの上にヤツが乗ったら、すかさずおなべのフタをしちゃおう。片手にブリキのチリトリ、一方は小ぶりのフタ…。ウン、成功。ヤツは今、やっちゃんの手の中に。サンダルはいて外へ。人っ子一人いない。外燈が一ヶ所燈いている。その下に近所の人が、今でも炊事洗濯に使っている共同井戸がある。なんとなくやもりって、水っぽい所好きな様な気がして、やっちゃん、井戸の大きな流しの所で、フタを開け、ヤツを流しにとませた。アツ、夜の空気っていい感じ、月が大分傾いている。ヤレヤレ、やっちゃん夜の大活劇、大捕物も落ち着いたし候。お隣りはまだ明るく、お話ししている様だけど、やっちゃんはもう寝よう。 おわり



ギャラリー・ためなが

東京都中央区銀座7-5-4

TEL (573) 5368~9

大阪店 大阪市道修町4-7

パリ店 パリ8区・マティニヨン通り18 TEL 359-98-11

平野美術鑄造研究所

平野 進



中野区江古田4-4-13 TEL 385-8832

一年 芦川龍彦

何もない。
私の頭の中は何もない。

ただ、私の体には太陽が放出するあの
不滅のエネルギーだけがある。

私は太陽が好きだ。
太陽の光を愛している。
何もない私の頭がこよなく愛している。

太陽と兄弟の私こと芦川龍彦。

一年 金城 寛

大自然はすばらしい。

人は大自然から物を出し、自分の物と言っているが、
大自然にはかなわない。

明日死ぬ私には、何があったらいいのかな。

一年 清水 靖

現実の自分をみればみる程、「造りたい、造りたい。」の欲
求の渦の中に埋もれて行く。今は只、無我夢中の中に身を任
せたい。

過去数年、自己を満足させる為にだけして来た行為が、こ
れから全く変わったものになるかもしれない。

二年 木村義一

いつ迄も続く騒音の波、にこりきった空気をいっぱい吸い
込んで飛び立つハトの群。この東京の空の下、わずかに残っ
た緑の中に小さなエントピア国がある。

このエントピア国には千数百名の人間が、何とも珍妙な社
会集団を営んでいる。この社会集団は師とあがめられ、地
位の確立したオトナ族、そして、多様な意志を未来への可能
性を秘めたヨウチ族の2集団からなり、互いに干渉し合うこ
となく活動が続けている。

又、この小さな国は他国と異なり、目ぼしい産業もなく非
生産的人間を絶やすことなく成長させることを目的とし、個
々の人格、個性を尊び、両者の人格は対等であるとした不文
律の掟の上に成り立っている。

もし、このエントピアがユートピアであるとすれば確かに
この掟は存在するかも知れない。この小国には狭いながら場
所も、設備もととのい物的条件の全てがそなわり、我々ヨウ
チ族の生長に必要なすべての糧がとりそろえられている。

ヨウチ族は自分達に与えられたものを活す為、当然、オト
ナ族の決めた一人よがりな枠に対し、反発し、その改善を要
求していく。そしてその改善の為、互いに納得のいく対話を
持とうと試みるが、その都度、彼らはその要求に対し、常に
その要求を受け入れる心と、深い理解のある態度を示す。し
かし、その理解ある言葉の裏に、オトナ族の立場、彼らを縛
りつけ動けなくしている力を、前近代的な封建的慣習の世界
を見てしまう。

このエントピアを変える為に、我々ヨウチ族の力、若さ、
無謀とも思われるエネルギーの爆発が必要ではないのか？。

矛盾と疑惑の砦がくずれ去る時、両者間の溝も埋もれ真の
対話がもたれ、この小さな国も真のユートピアになるのでは
ないだろうか。

 春風洞画廊

東京都中央区京橋1-5 TEL (563) 5455(代)

「20世紀美術のハイライト」展

ピカソ、ブラック、クレー、カンジンスキー、
ベーコン、ファイニンガー、ド・スタールなど

10月5日(木)~21日(土) (日曜、祭日休み) 入場無料・ぜひごらん下さい。

FUJI TELEVISION
GALLERY



フジテレビギャラリー

東京都新宿区市ヶ谷河田町7 フジテレビ内

TEL (357) 0660・0661・0670

「たぶん……」

二年 厚地正信

たぶん、酔っているせいでしょう。
 妙に体は軽くなり、闇の中を浮遊しています。
 風と浪の響に弄ばれ
 体の内には風が吹いています。
 しばし、気まゝに、この浮遊状態に身をまかせ
 ユラリ、ユラリと海面に浮く海月^{クラゲ}になった私。

たぶん、酔っているせいでしょう。
 妙に全てが生きている様に見えます。
 半月の光を受けた石は、ジット踞るケモノ
 そして浪頭は海坊主……。

たぶん、酔っているせいでしょう。
 もう一人の私が星夜に浮遊して
 私の方を見つめています。
 たぶん酔っているせいでしょう。

——石切場の夜——

スケッチ

二年 久保田和子

グレーのベールのかさねぎ
 心のメモリアルの中で
 木琴のようにはずんだ胸をつつんでいく
 そして
 花粉のとうめいな一しずく
 そんな遠い
 流木のやけこげた断片が
 今の私のコンテの中を流れて行く



「私の好きな物・事」

二年 伊東 緑

コーヒーのにおい
ゴツンとした桑の木の畑
小さく白い花
きれいな食器
レモンの切り口
猫さん
写真を取ることに
釣人と川の風景
エジプトの村長像の彫刻
アルタミラ洞窟の壁画



幼ないころを思い浮べること
山水画みたいに、いくつもいくつもかさなった
山のある眺め
そして、台風が去った日、青空に白い雲がふかふかと
流れていた様子など。
アリジゴクのいる土手。
中でも北国に春が来る様子が好き。
吹雪の季節が過ぎ、山の雪がどんどん溶けて
根雪もまさになくろうとするころ、
ぼうぼうとしていた山の木々の間から
マンサクという卍の形の黄色いひかえめな花が咲く。
根雪の下からは、ふきのとうが頭をもたげる。
うぐいすがきれいに鳴き、
今度は、もくれんによく似た白いコブシの花が咲く。
雪はどんどん溶け、川は水かさを増す。
山はほんのり活気を見せだす。
そんな様子が好き。



A君はこの夏、意欲を燃やしてとある石切場へ彫刻をする為に出かけて行った。

用事で帰京した彼はショッキングな土産を手になっていた。

彼の話「石切場で働く職人さんは、僕達が小矢助とハンマーをもってする仕事を、大きなハンマーいっ丁でスパッスパッと落としてゆくんだ。他にもまだある……。」

特集「なんでも10年」

上野近辺に職人さんを求めて飛び出した。

丁度、祭の用意で町は華やいでいた。町の空気と示し合わせたように、華やいだ、古風な外装の店を見つけて入る。

「御免下さい。」

そこは、見慣れた文様、見慣れぬ文様、一色、多色の千代紙と、その紙で作られた人形、可愛い物入れなど豊富な品で埋まっている。残念ながら職人さんの話を直接聞く事は出来なかった。ご主人の話である。

＝ずいぶん昔の物ですね＝

「ええ、そうです。」（がこもっている。）

「これなんか何回も何回も入るんですよ。でも、すぐ出ちゃうんですよ。東京で一軒しかないから。」

と一枚の千代紙を手にする。多色の素晴らしい上がりだ。何でも江戸時代の版木のみを使っているのだそうで、新らしいものは、と聞くと

「江戸のは良いし、新らしいものは手数もお金も懸るから。」

＝紙人形ブームでそうとう出るのでしょうか＝

「そうなんです。ですからもう間に合わないような状態なんです。いろんな創作の人形とか昔からの江戸姉様とか。とにかく昔からの文様ですから人形に作っても、何をしても合う訳なんです。」

半ば税務所の職人の目をして、半ば“江戸姉様”という言葉のなつかしい、優しい響きに酔って店を出た。

顔料によるのだそうだ。すっきりとした紺と白との映す文様、彩やかな多色の模様を刷り上げる職人さんの苦心、伝統を守る人の心情を思う。

「今ね、入れ歯がだめんなっちゃってね、話しにくくてしょうがないの。」

ここは、ある家具屋さんの店先である。

老人が一人、黙々として桐箆箆に取り組んでいる。少々無理をお願いして、話を伺った。とはいえ。30分にもわたって微に入り細にわたって説明があり、我々取材班、最敬礼といったところだった。勝手ながら要点を上げたい。

＝何歳位の時からこういう仕事をしているのですか＝

「そうなあ、いくつ位の時からかなあ、14位の時からかなあ。なにしろ小さい時からやってるから。」

＝箆箆を作るまでに何年位かかるか＝

「そうね……5年位かかるでしょう。5年も経れば。みっちり。だいいち道具が必要ですよ、何をするにも。」

この点、道具を作る難かしさを多少なりとも知る私達にも、わかる事である。話は続けられる。

「いきなり箆箆をやるったって出来ませんよね。まず第一に道具が必要でしょ。道具が無くっちゃ物は作れませんからね。鉋のとぎ方、鋸の使い方ね、そういうものを最初やってゆくんですよ。それからいろいろ、まあ、板を削るとかね、そういうものでだんだんわかって来るんですよ。」
修業五年の内訳である。

＝材料について＝

「大体、一番いいのは東北です。あっちで、あの、山の中でその、雪の多いとこで育った木が一番いいんですよ。身がしまっってね。」

最高の材料を扱える職人の幸福は、その材料が育った環境に

ステーションギャラリー
**Station
gallery**
しのばず画廊八重洲店

東京都中央区八重洲2-5 不二ビル TEL (271) 3810

(東京駅八重洲口、日本航空前)

彫塑用具と材料は！

上野公園
都美術館内

浦崎画材店

TEL (832) 2416

取扱品； イタリア油土・人体用動物用芯棒・ 回転機・金へら
鉄へら・パス類各種・製作台・万力・キリガネ・スタッフ
絵画材料一式・etc (地方発送もいたします)

も増した厳しさと共にくる。正目板を見せてこう言う。

「これが一年ですからね、これも、あの、一年ですから。目一本一年ていうんですからね。ですからこれ、大変です。」
材料の話をするうちに思いついたように

「だからやっぱり、いいものやるにや、やっぱり職人としても十年の修業がいらいね。そうすりゃ、たいがい、いいものが出来ますよ。五年じゃ、そりゃ形は出来ますよね、へっ、形は出来るけれどもいいものは出来ない、なかなか。」
訂正。修業十年だそうである。

＝今、簞笥のデザインは決まっているんですか＝
「形ですか。決まっていますね。昔からの形が一番いいんですよ。着物を入れるのに便利でね。」

昔からの人間の知恵を大切に作る職人だ。そして、
「昔はみんなね、今と違って腕自慢でやっていたからね、今みたいにあの、機械でもって大量生産でやってません。家具類はね。昔はもう、腕がいいとかわるいとか、そういうもう、腕をきかせた時代があったんだがね、みんなもう手作りでね。」

＝どうですか、今の大量生産は＝
「今のもう品物なんか見られないですよ、おかしくってね。あんまり悪くってね、仕事が荒くって。」

常識的な答えも職人の口から出ると痛烈な批判になる。後継者、いい材料の消えてゆく事を嘆きながらも、

「桐細工はね、どこからどこまで、裏を見たって何を見たってね、あのお、一つもごまかしがきかないんですよ。だからね、どこを開けてみたってきれいーになっていますよ。」
職人にとって仕事は一生をかけて愛し、つきあってゆく女房なのだ。

今、手がけている簞笥は、お客さんが30年前、嫁入りの時から使っているものだそうだ。だが修理を終えた簞笥を見ると、まるで新らしいもののようだった。良いものを愛する職人さんとお客さん。そして、新らしくなった簞笥は家に房って、30年も前の思い出をこの時に、引きもどすに違いない。

興味あるもので、剥製の仕事があった。街を歩きまわり、2軒目の店で工場を聞いてお邪魔する事となった。
社長さんは日本でトップクラスの技術者らしい。

「我々はねえ、彫刻的な事も含まれているんですよ。まず基礎とすれば、骨格、これが基礎なんですよ。」
獣の敷き物、数十の鳥、獣の剥製の中に白い頭骸骨を指して
「これの全体。私どもの場合はね、人体も全部やって来たんです、解剖から大体その基礎は全部やって来たんです。動物を作るにしても、筋肉から脈管学までやって来たので、一通りの動物の生態なりそういうものを標本にする場合には、ちゃんとその事は出せるわけです。唯、皮をかぶせて出来ましたというんじゃないくて、うちの場合は、特に筋肉を出すような仕事では認められている位いいんです。自負出来る訳なんです。」

ルネサンスの作家のように、科学的合理性を身につけた社長の話は自信に満ちて続けられる。現代の職人なのだろう。

「毛の浅いものは筋肉を出してわかるけれども、深いものはわからない訳ですよ。それには普段、生きているものの生態を観察しておく、そういう事をしておかなければ……。躍動的なものも取り入れなければならない。それには常にもう、外に出ていれば犬でも猫でも何でもかまわず、動いているものは常に観ているわけです。そうやっていつも目を培っておかなければ、いざ手をかける時には復元するような物は出来ない訳です。」

車に乗っている時にも観察を怠らないという。

「何でも出来なければいけない。あれをやって、これが出来ないというような事は、こういう職業に携わっている以上許されない。」

工法とあいまって、大変な工夫が必要らしい。

＝ポーズを決めるポイントは＝
「そこは、見解の相異でね、装飾的にやるか、生態的にやるかという事です。一般のお客さんはある程度までは装飾的に。結局、あまり無理な姿勢はおかしいんだけど。」

風 土 菓

桃 林 堂

東京店 東京都台東区上野桜木1-5
TEL (828) 9 8 2 6

本店 大阪府八尾市東本町2丁目
TEL 八尾 0729(91)2168

東邦画廊

東京都中央区日本橋通り2-7
TEL (271) 9174

The Complete Works of
MARINO MARINI
¥18,000

株式会社 明治書房

東京都千代田区神田駿河台2-4
TEL (291) 0726, 8120

美術展覧会の事なら
美術品扱い専門店の
弊社を御利用下さい
会場装飾設備
陳列荷造出品手続

日本美術商事
株式会社 (ホシヤ)

東京都台東区上野公園都美術館内
TEL (822) 0626~7

実際にね、羽根を広げて木にとまっているのがある。こんなかっこうは鳥自体はしない訳なんですよ。でもそういう派手やかなかっこうを希望するお客さんも居るわけで、そこら辺が難かしいところなんです。ほんとうらしく見せる虚が必要なんです。」

標本を作っていた社長にとって、難かしい問題のようだ。

「外国の国旗にあるワシのかっこう。あんなかっこうは動物園に一日中いたって見られない。あれだけ大きなもので、威勢がいいからやったのでしょね。〇〇製薬のワシのようなあんなかっこうはしませんよ。」

と笑いのうちにウヤムヤに……。

一般の人のイメージを考えて、そこいらのところは割切っているようだ。現に、

＝剥製には感じられない暖かさ、柔らかさについて＝

「そう、自分のものをやる時にはそこまでやります。それを出すにはやはり、かかりっきりでやらなければ。ポイントは教えられませんかね。」

当然、生態的にやるのだ。秘伝といったところだろう。

今までいやな感じしかもてなかった剥製も、ここまでつっこんで仕事に打込む人が作れば素晴らしい物が上がるだろうと思われた。社長の話のテンポと話の陰に隠された努力の量、そこからくる自信にいささか圧倒された。

一度、話はだめだと断わられた石屋さんを「うちにはもう一人話のうまいのがいる。」との言葉を頼りに再度 アタック。何しろ昔気質の職人さんで全く口を開いてはくれなかった。もし、若い人が居なければ仕方ない。ねばってみようという決心なのだ。幸いなるかな。休憩時間、若い人と二人で職人さんはお茶を飲んでいた。

＝ここ墓石が主ですか＝

「そうね」

＝あまり機械仕事は入ってない訳でしょう＝

「入ってないね」

＝機械で上げた方がもちがいいと聞きましたが＝

「いや、そんな事はないよ。機械の方はやっぱり だめだなあ。やっぱり、手が一番いいんじゃないの。機械はね、熱で石が焼けちゃうんだよ。だから、最初はきれいに出来るけれど、一二年たつと、ほら、手で研いたつやと機械でやったのと、一年位で機械の方はぼけちゃうんだ。手でやるとね、ほら、熱が出ないしね、無理しないから、つやも消えない訳なんだよ。」

＝道具は焼き入れなどするんでしょ＝

「いや、ほとんどタンガロだよ。昔はほら、鋼使ったけど、今は鋼じゃだめだね。」

ここでは道具の変革があるようだ。

＝仏像の注文はありますか＝

「ええ、ありますよ。」

墓石とどちらが面白いかという質問に困った様子。やはり仕事としてかたづけられるらしかった。それでも仏像の時は彫刻の学校へ行くとっていた。

＝石切りは何年位で一人前ですか＝

「やっぱり十年だろうね。一生見習いだけどね。」

＝ノミの焼入れは何年位で憶えられるか＝

「焼くのか？やっぱり十年かかる。石たたくのに十年かかるからね。」

又しても十年である。石の場合は材料になじむ事と、道具を作る事とが同じなのだ。

「石屋の仕事は出来ないのを無理に覚える。だから大変なんだ。ほら、良く言うじゃない。大工の真似は出来ても、石屋の真似だけは出来ないって。それだけに厳しい訳。」

＝一つの墓石彫るのに何日位かかるか＝

「そうね、やっぱし、一つの墓作るにや、やっぱり一ヶ月はかかるな。」

地道な仕事である。そういう仕事だけに質問してみたくなった。

＝仕事中、気持に変化はありますか＝

「それはあるね、人間だから。大いにあるね。」

おんこつ
みはく
上野公園前
TEL 832-8746

うなぎ・とり
鳥 正
上野桜木町(821)3618

画部喫茶
ルオ
本郷本店 本郷5 東大赤門前
TEL (812) 3456

松月庵総本店
台東区上野池之端3-4
(上野動物園裏門前)
TEL (822) 0411

ほっとした感じである。

＝気分ののらない時の仕事もお金になるのでしょ＝

「それはね。やっぱり、修業してきただけに同じようには出来るね。」

自分の気持の問題だけだそうだ。この辺がプロなのだ。

最後に私達は人形屋さんを訪ねた。

鈴虫の鳴く店には、いろいろな人形の頭が飾ってある。しばらく待つうちにご主人が散髪を終えて戻られた。お話を伺いたいと言うと、

「さあね、私どもは職人だから。どうですかね。」

と笑う。ほとんど白くなった頭の、いかにも下町の職人さんらしい人だ。

＝もう何年位、やっていらっしゃるんですか＝

「十六の時から、でも六十五だから。ヘッヘッヘ 昔は何んていうか親父にひっぱたかれひっぱたかれ、あれでさあね、身内だろうが何だろうがかまわないんですよ。学問でしているのと違って頭はないですよ私達。」

＝菊人形の仕事が多いのか＝

「ええ毎年。もう十何年もやってます。」

何でも、もうかるそうで、毎年規模が大きくなるらしい。

＝いろいろな顔を作るには、それなりの勉強があるのか＝

「いや、私達は、へへ、何てんですか、唯、自分達が自然にやっていますね、するとその家の人間に似るといいますね。」

＝やはり身近な人を自然に見ているという事ですか＝

「ええ、そうですね、そうですね。」

＝修業の時は、のみの研ぎ方などから入るのですか＝

「これなんか、へへ、突いた跡なんですがね。」

そう言って差し出した手には数ヶ所に傷痕が見られる。

「まあ、普通、修業十年といいますがね。私の兄弟子なんざあ、これをいじらせてもらえないで手だけでしたよ。手だけで一人前なんです。」

この時には、手に昔のものだという桐の頭があり、それを見ながら話を聞いていた。わざわざ、出して来てくれた物だ。

「親方は絶対に頭には触れさせませんでしたよ。年期があけたといっても手だけですからね。まだ半人前ですよ。」

何だか桐の頭が震えそう、いや、手が震えそうである。

ここに、とっておきの話がある。職人さんにしてみれば一生忘れる事のない思い出だろう。それは

＝個人的な注文はあるのか＝

「ええ、あります。千葉のある先生の奥さんが亡くなって、奥さんの人形をこしらえて、先生の寝室にかざるんだって、等身大のウインドをこしらえて、奥さんの着ていた着物から、指輪まで全部はめ込めるようにしてくれって頼まれて、作った事があります。」

というのだ。今にして思えば少々不気味な感じもしないではない。けれど話を聞いた時、この職人さんは素晴らしい仕事をしたんだなという感激を、そのままに受けとめた。

編集にあたり

これで終りです。他にも職人さん訪ね。話を伺って来ました。やはり特殊な仕事に携わる職人さんの話は興味深く、又、物を造るという点に共通する何かを感じたのです。

私達は彫刻に志した者です。

特集には彫刻論、彫刻作家の言葉などを組むのが、より妥当であるでしょう。

しかし、そういったものが、私達の中で、何処かに、空転するであろう要素がある事への危惧の念は否めません。

私達は活きた人間の声を求めました。

そこに職人さんが居ました。居ました。

毎日、同じような生活を送る人々

その仕事の陰に、限りない喜びを見出す人々でした。



油絵・版画・彫塑

太平洋美術学校

規則書は切手50円封入の上下記へ

事務所：東京都荒川区西日暮里3-7-29

〒116 TEL (821) 4100

ガク縁各種製造卸

柴山製作所

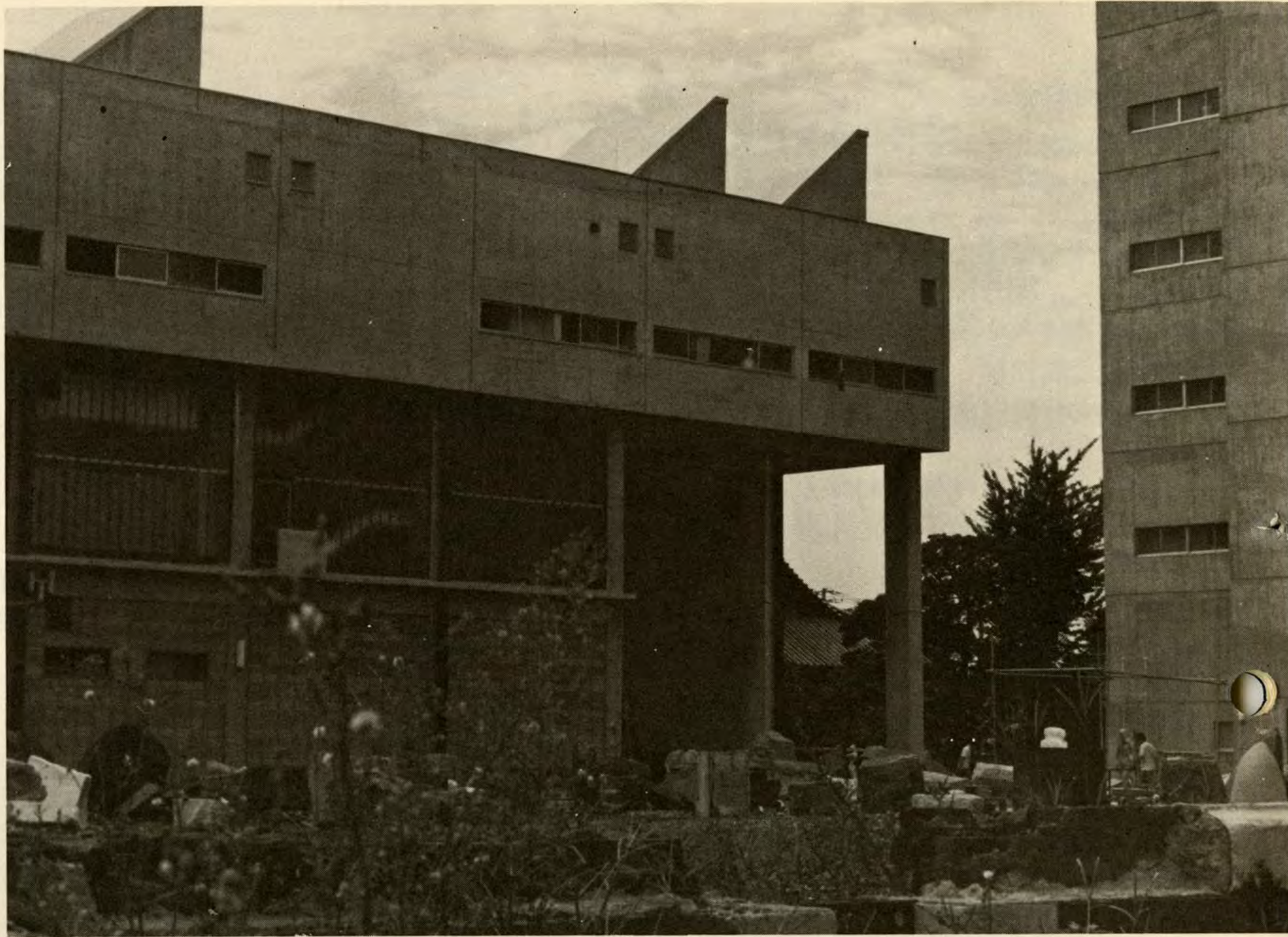
東京都台東区根岸2-1-2 TEL (873) 9146 代表



ある日の教室



実材部屋（石彫）



彫刻棟



実材部屋（木彫）



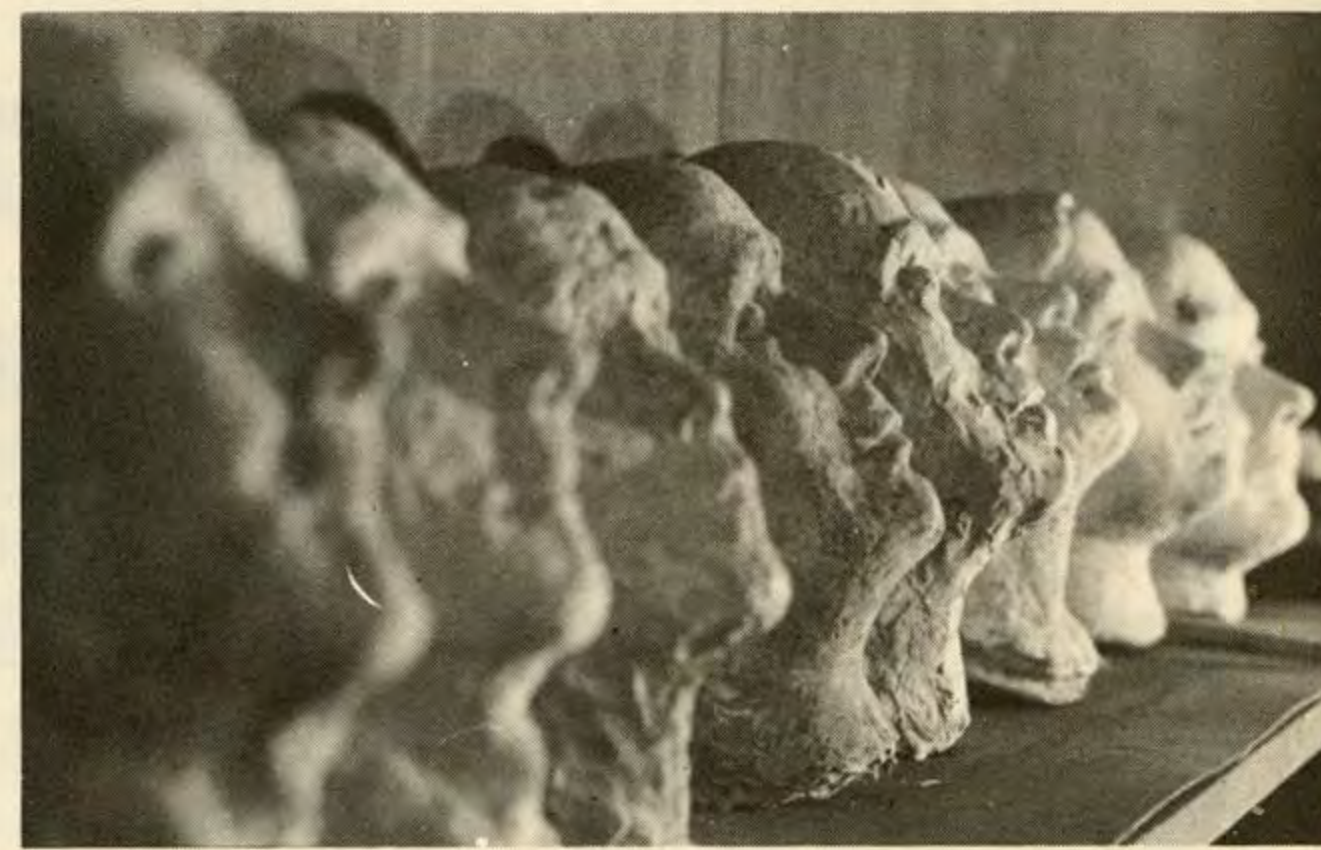
屋外作業場



実材部屋（金属）



（フォークリフトでの運搬）



“首” 46年度生

一年 宮脇正雄

“Give a tilt to me!” 何度繰り返しても、現在の状況は変わりはないのに、今の私ときたらもうこう繰り返すことで頭がいっぱいだ。へたな思索はかえって私を落ち着かせるばかりで、あゝ、陽はもうあんなにも高い所に昇って来ているというのに、私は快い日陰で、眼るのでもなく、活字を追うのでもなく、ただ酸素呼吸をしているだけなのだ。

明日がやって来るだろうという事は、今日が終わる事でいたい察しがつくという何ともいやらしい悪循環は私に何も与えてはくれない。それどころか私は、この悪循環の中でしだいに腐敗していくような、どこか神経がにぶってくるような一種の不安にかられてしまう。だが、この不安にも—
“Give a tilt to me!” と叫ぶ事によって助けられる部分があるとしたら、そして明日が来ないという事が、今日はありはしなかったのだという自覚に変貌できるとしたら、自分の死期が明確な時と、そうでない時のこのふたつに対しての、
“今いちばんやりたい事は何?” という質問に、“同一” という答えをもって、私は生活のパターンにそれなりの傾斜を持つ事ができるような気がする。——滑走路は水平であったけれど、そこから飛びたつ物体は、つねにそれなりの傾きを必要としていた——

三年 南 哲家

満員電車のムツとするひといきれの中。
整髪料や汗や体臭、と様々に入り混じった匂いの箱詰め。そんな中に詰め込まれていても涼しげな装いを眺め、様々な匂

いの言葉をきくことは、こちらの気持ちをも軽やかにしてくれるものである。勿論、女性のことです。

高校生やおばさん、或いは子供やOLなど、それぞれに匂いを持っている。特に若い女性の匂いは、化粧品の匂いでもあろう。匂いは香水にしても他の化粧品にしても単独で使われることはないし、殊に香水などは、その人の体臭とまざりあって、いろんな匂いを作るものらしい。しかし、若い女性の強い化粧品の香りはむしろ暑苦しいし、いずれもが同じような匂いなのは、同じ化粧品を使い、同じような化粧をして、強い香りをもつものを好むせいであろうか。

そんな中で、ほのかに漂ってくる匂い袋の香の香りは、涼しさを感じさせる。それともそれは、彼女達が着ている涼しげな和服のせいであろうか。湿度の高い夏に、紅毛の人と同じように強い匂いをふりまいて歩いてゆく人が前にいた日には暑くてたまらず、すれちがってゆく人々の中にかいだ香の匂いほど涼しいものはあるまい。

紅毛人の強い体臭を消すために作られたきつい匂いの香水を、体臭の弱い日本人がつけても調和する筈もあるまいに、強い香りをまき散らして歩くのは、ひょっとして「香害」ではあるまいか。臭いの弱い日本人には、香にかぎらず、石鹼の匂いや湯上がりの匂いのように、匂いそのものや、空間にうるおいを求める方向が最もふさわしいと思われる。

甘酸っぱい匂い、涼しい匂い、乾いた匂い。或いは苔の匂いや水の匂い。どれをとってみても、すっきりとした感じをもたせる匂いが、日本の夏にはふさわしいと思うが、いかなものでしょう。

いろいろと書いてはみたが、特別に犬みたいに鼻をクンクンさせて嗅ぎまわっているわけではないし、眼をギラギラさせて女性のそばに近づこうとしているわけでもありませんので、念のため。

あと一年だと言うのに、こんな阿呆なことばかり書いてこの夏を過ごしているようじゃ、今年も大したことはないなあ、まったく。

常設・貸画廊（壁面25m）

瑞穂画廊

三宅敏枝

東京都中央区銀座2-2 越後屋ビル3階 TEL (567) 2660

青木画廊

東京都中央区銀座3-5 TEL (535) 6858・3944

一年 池田秀俊

黒人の面や像を見たことがある。

あの奇々怪々なる“かたち”はいったい何であろうか？

そのうえさらに、実に写実的な“かたち”までも見てしまった。

私にとっては、『何でこんなものがあるのですか、困ってしまうのではないですか。』といったものであった。

したし、それらは単に分銅として使われているに過ぎない。

だとしたら、あらためてあの“かたち”は何だろうか……

彼らには祖先から伝わる“ことば”があるに違いない。

それにしても、あの母性像は……あの面は……

彼らの中でどんな価値をしめているのか？

日常生活と密なかかわりをもっているのだろうか……

彼らがそれをつくるときの意識は？

どんな衝動があって……

いや、そんなものはないのかも知れぬ。

まったくの自然とのか、わりの中で、

つくらざるをえないのだ。そんな世界がそこにはある気がする。

つくらねば生きてはゆけぬ……

それほど密なのではないか。

自分自身の“ことば”もはっきりもちえぬ私にわかろうはずもない。

アフリカへ行こうが、南海の孤島へ行こうが

わかろうはずがない。

文明の洗礼を受けたものの悲しさである。

逃れようがないものがそこにはある。

そんな世界に自分をおいて、いいものができるという訳ではない。

が……なんの裏付けもない自分に不安を感じる。

だから、一度その淵からのぞいてみたい気がする。

二年 木村裕子

高校を出てから2年半になる。この間、私は大きく大きく変わった。といっても本当の自分が、ほんの僅か見えるようになっただけのことかも知れない。

ずーっと昔、小学校にもあがらない頃の自分にむしろ、現在の自分の長所にしろ短所にしろを、ストレートに見い出すことができるような気がしている。

自分の道を、無器用に手探りで進もうとしている私は、幼児同然なのだろうか。

どうりで中途半端で頼りない。

しかし、苛立ってみたり、開き直ってみたりしながらも、私は私だけの道を行くしかない。もしかしたら、一生幼児ののままかも知れないが……

二年 甲斐文彰

おんな……通常「おとこ」の近くに住み、家畜として飼いつけられ易かった祖先の性質が、いまなお痕跡をとどめている動物。

動物学者の多くは、かつて他から隔離されていた状態にあったあいだに獲得したある種の従順な性質の痕跡を「おんな」に認めている。この種属はあらゆる猛獣の中で分布範囲が最も広く、地球上、棲息可能な地域の到る所に出没している。元来猫族に属し、動作が柔順で品があるが、雑食動物で、訓練しだいでは、口をきかないようにすることも可能である。

おとこ……取るに足らない、もしくはさして重要でない性を構成する一員。人類の男性は、(女性のあいだでは)一般に「単なる人間」として知られているが、この種族には家族に衣食を十分に供給する者と不十分に供給する者と、二種類がある。

——A・ビアス「悪魔の辞典」より——

栗津画廊

東京都中央区日本橋江戸橋2-3 TEL (271) 9007

富士ギャラリー
加藤版画研究所

ギャラリー 東京都中央区銀座8-5-8 TEL (571) 2419, (572) 0640

版画研究所 東京都世田谷区等々力7-21-14 TEL (702) 2389

大学院2年 畦地拓治

「自己完結——出発点と回帰点、又は不可能性へのプレリュウド——その断章」

〔4月23日〕

今、我々は何処に存するのか？

この不思議なワンダーランドは何処まで曲がりくねって続いているのであろう。しかし我々は、この曲がりくねった非形の中を彷徨い走らねばなるまい。

〔5月14日〕

人間の生及び死は現在の私にとってすべて“時”に集約されている。又その逆も言えようが、しかし今の私の取巻かれている環境からすれば、前の言葉しか出て来ない。現在生きていること……しかし生も死を意識には表わしはしない。けれど、この生と死との意識の絆は切れているのではなく、時々電流のごとく（どちらにも）走り動く。そして己れが意識される。だが、この環境に取巻かれている私にとって、まことに一瞬の出来事でしかない。たとえそのショックがどれほど大きくとも、私は動きつづける時計のごとくになってしまう。その時計が自ら止まるまで動きつづけるごとく……

〔8月9日〕

木材、上下四方の切断、木目とはそうして出来たもの、木目は人工美である。（京都にて）

〔11月28日〕——ある書物に贗せて

何らかの彫刻的な試みについて、我々が、それがあある袋小路に達すると考えたり、知ったりしても、おそらくそれだけでは、その試みを効果あるものとするには足りないだろう。何か新しい彫刻の中で、絶えず危険にさらされている法則の持つ厄介な、例外そのものとしてまた、生成状態にあるより大きな運動のすでに消滅しつつある瞬間として理解された彫刻の、孤独な沈黙した断言をとらえる度毎に、我々は或る約束が与えられたという感じを味わうのだ。

〔2月11日〕

反映物（reflection）、物体、関係、プラスチックマシーン

変化、交感、抵抗体、ひづみ、二重構造、増幅、不協和音、増幅作用、降下、触手、磁場、影像（Image）、外観、光景、空間、内蝕するもの

〔3月24日〕

出会いとは、根源的に自分自身に出会うことであらう。いつもはすぐれている自分自身に巡り合う。

〔4月6日〕

頭の中を意識が走っている、走り続けている。私は創ることの真の孤独性を感じ始めている。生のとなりに死があるように、創る喜びのそれには、さびしさが根源的にあるようだ。それはつまり生の孤独性、裏かえせば、死というものを直感したのかもしれない。しかしこれは真に根源的なものだ。それ故に、それを消したり乗り越えられたりする性質のものではない。だからこそ人間は生を持って存する。

〔6月17日〕

能動的な生、これは自然界において人間の特権かもしれない。ある一人の表現者として偶然の出会いをもって必然にまで持っていかなねばなるまい。すべてにおいてそうせざるを得ない。これも又人間を持ってしての特権的生かもしれない。必然の最高形式な nature であらう、そして表現者も別の形で最高形式に進む、しかし表現者にとってそれは求め得ぬものかもしれない。そうであるのなら、表現者いや人間は常にプロセスだけの存在かもしれない。

〔6月24日〕——また言葉の羅列

今何かの起ることを待っている、何か起れば何かに変化する。この有限的生の時間がある小さな点によって、瞬時に無限的生の時間へと開始させることが出来るかもしれない。（シャッターを押すように）今走っている、走りながらその小さな点を待つ、もしかしたら……今まで走っているが故に、その小さな点を見落しているのではなからうか、そんな不安に襲われる。



兜屋画廊

東京都中央区銀座8-8-7 TEL (571) 6331, 4305

いづみや

は
たえず皆様の立場にたった
サービスをモットーに
いたしております。

取扱商品

- 水彩・油彩材料
- デザイン材料
- 彫塑材料

いづみやチェーン店名

- 池袋店 Phone 03 (981) 7221
- 新宿店 Phone 03 (352) 8536
- 新宿ステーションビル店
- デザインコーナー Phone 03 (352) 6669
- 画材コーナー Phone 03 (352) 0537
- 額絵コーナー Phone 03 (352) 6636
- 代々木ゼミ店 Phone 03 (370) 5515
- お茶美店 Phone 03 (294) 6558
- 横浜店 Phone 045 (461) 1837
- 大阪梅田店 Phone 06 (372) 9272

「断想」

一年 渡辺紀久子

絶食という状況のもとで、
自ら作りあげた状況のもとで
私のお腹は、空っぽになる
全身の脱力感と倦怠感の中で
ひたすら脳波だけが、もがいている
しかし、非情にも、脳波は
壁にぶち当たり、突き返され
無軌道な孤をえがく。

私達が存在している状況のもとで
幻想をうち破った時、
腹の中の余計な観念を捨て去った時、
そこに真実が存在するのだろうか？

毎日、彫刻校舎という名の生産工場へ
足しげく通いつめる私達。
毎日、お腹の中へ食物を送り込む私達。
私達を抑圧しているのは私達自身であり、
いくら酒を飲み、騒いでも、
何も解放されはしない。
そして、こうやって文章を書いても
何も解放されはしない。

しかし、言葉にして吐きだしてしまえば、
絶食して、お腹を空っぽにしてしまえば、
欲求も吸収も、倍の力になる。
少くとも、満腹の状態よりは……。

「独り言 もしくは つぶやき
 もしくは ぐち
 もしくは ……」

彫2 寺見 章

自治会執行委員なるものをやっていると、いろいろ面白い
ことにぶつかる。立看を校門を入れて正面の椎の木の下に立
てると学生部のお役人がすっとんで来る。あそこへ出しては
困るというのだ。

学則で立てていい場所が決まっているのは知っている。し
かし学生の意見が何ら反映していない一方的な学則など認め
られないというのがこっちの立場なのだ。この学則について
は、守られていない部分もあり、それは最早常識化している。
言はば慣例、学生の既得権なのであってそうやって権利を1
つ1つ獲得し学則を変えていかなければいけない。(もちろん
話し合いが先であるが。)あの場所に立看を立てることについ
てもここ何年来そうしてきている。効果を考えると一番いい
場所なのだ。げんに学校側も必要な時にはあそこに掲示板を
つくっている。だめだといえば、何故かということになる。
言うことには「美観がそこなわれる。」のだそうだ。「木も大
事にしなければいけない。」という。さらにはあの校門を入れて
正面の所は芸大の顔であり、椎の木は芸大のシンボルなのだ
だそうだ。まさに面よごしだからやめてくれということになる。

ある美術学部の先生にいたっては朝すがすがしい気分であ
る。あのきたない字というか、立看を見ると1日気分が悪
いというのだ。当局の言う美観とは旧本館跡地を整備して解
放して欲しいという運動部の強い要求を、ただ金が無いとい
うだけでけり、次に建つ時期の見通しもないまま危険な状態
で放置しておくようなことに代表されるものなのではないか。

学生の声はおさえればおさえるほどたくましく育つ麦のよ
うなものだということを知るべきであろう。芸大はいざ知ら
ず……。それにつけても「メンツ」なるもので社会が動く、
「大人の世界」などには仲間入りしたくないものだ。

個展・グループ展に 貸画廊(規則書郵送)

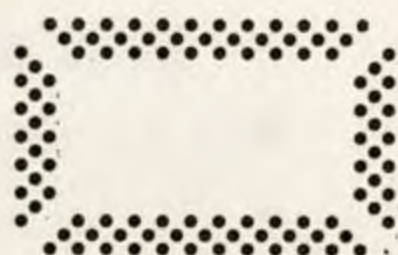
地球堂ギャラリー

A 室 B 室
壁面18.2m 壁面33.9m

TEL. (572) 4811

かばん・はんどばっくの天地堂2階

東京都中央区銀座8-8-6(8丁目バス停前)

BUMPUDO
塑造・木彫・石彫

★ 優秀な彫塑材料が豊富に揃っております。

カタログ送呈

造型材料総合センター



文房堂

洋画材料・デザイン材料・彫塑材料・版画材料 〒101 東京都千代田区神田神保町1-21 TEL 03(291)3441(代)

住 所 録

菊池一雄	世田谷区北沢1-24-17	(466)7808
淀井敏夫	世田谷区北沢4-21-13	(468)0046
舟越保武	世田谷区桜1-56-15	(429)5509
菅原安男	中野区江原町2-22-1	(951)1986
千野茂	練馬区富士見台3-23-16	(990)0882
伊東繁	品川区西品川2-1-13	(492)2630
澄川喜一	北多摩郡清瀬市中里1-734	0424(91)2150
荒川明照	三鷹市深大寺3897	
細井良雄	保谷市住吉町6-7-13	0424(21)0503
尾沢正毅	横浜市戸塚区波沢町316	045(871)4805
原武典	市川市奉免町37-30ひめみや団地	0473(37)3538
長沢市郎	世田谷区奥沢7-39-21	(701)8605
山本正道	藤沢市鵠沼2484	0466(22)7075
手塚登久夫	世田谷区経堂2-8-3 松村方	
中井瑞代	足立区日の出町33-14 増田方	(881)4804
黒田能勝	品川区小山1-4-8	(782)1359
茂木弘行	杉並区梅里2-25-22 間庭方	(311)4634
植草正勝	千葉県舟橋市本中山2-18-4	0473(34)5232
吉野毅	練馬区豊玉北1-13	(991)3559

研 究 生

増山俊春	小金井市本町4-14-15	0423(81)6284
川井一彦	埼玉県大宮市盆栽町119	0486(64)1085
青木三四郎	千葉市院内町30	
鈴木孝美	調布市国領町3-17-1金子町団地4-422	0424(86)0482
片桐克彦	川崎市生田区3183	044(91)6311
豊田晴彦	横浜市港北区高田町1738-9	045(592)3626
高橋カオル	文京区西片1-15-1 山岸方	
日原公大	練馬区北大泉212-5	(924)6590

大 学 院

46年度

畦地拓治	世田谷区上祖師谷1-17-6	(308)0423
池田清史	渋谷区千駄ヶ谷3-19-5 木村方	(408)4666
石井紀子	杉並区和4-4-23	(323)7809
江川弘子	練馬区関町1-119-6	(920)4576
大勢吉一	千葉県我孫子市本町1-5-5	
粕谷圭司		
河原明	横浜市神奈川区菅田町1592	045(471)9578
木曾幸博	横浜市緑区田奈町東急たなドエルA-102	(981)9427
日下雄二	北区稲付西山町2047	(900)1767
小林亮介	武蔵野市西久保1-10-1	
猿川匠	杉並区久我山5-31-23 渡辺方	(332)1438
関谷光生	練馬区豊玉北4-8	(991)2462
田代勝	杉並区阿佐谷北4-6-22 真下方	(338)7629
田中美智枝		
西村富弥	横浜市神奈川区六角橋4-20-28 松葉荘	
西村祐一	台東区元浅草4-5-7	(841)5644
幡青果	世田谷区尾山台1-6-7	(701)8760
早川正洋	中野区沼袋2-27-12	(387)6923
三浦大和	板橋区仲町37-10 千曲荘	

山崎英五
吉岡正男
鷺崎直子

台東区上野桜木町1-2-1 鈴木方
松戸市大字馬橋1399-3
武蔵野市西久保1-10-1

47年度

河原美比古	松戸市岩瀬280	0473(62)3214
国松明日香	練馬区石神井台3-27-14	(996)7773
久保制一	府中市栄町2-1-13	0423(61)3195
黒川員臣	新宿区戸塚町1-255	(209)5858
酒本邦治	鎌ヶ谷市初富446	0474(43)5577
須藤博志	川口市青木町1-2736 大沢荘	
鶴見修作	調布市国領町5-1-5 金子方	0424(85)2789
登坂秀雄	国立市谷保6665矢川地アパート8-401	
登坂真澄	〃	
服部英夫	世田谷区奥沢7-12-11 伊藤方	(702)2718
日原康	川崎市生田5971-1	044(96)0821
本田貞伸	松戸市上本郷1715	0473(62)9948
前田精史	岩槻市加島中島1164	0487(56)4628
吉江庄蔵	松戸市小根本27 吉田方	0473(63)8918
渡辺千英子	品川区北品川1-23-16	(471)3838

学 部

44年度

有賀典子	練馬区上石神井1-79-3 芸大寮	(920)0863
石松豊秋	〃	(920)0863
市川明広	台東区谷中2-9-23 石倉方	(828)9847
岩田実	杉並区荻窪1-30	(398)1184
植木舜一	練馬区上石神井1-79-3 芸大寮	(920)0863
岡部史	千代田区九段北3-2九段コーポラス306	(261)0482
小田信夫	杉並区久我山3-17-32	(333)2440
笠置三郎		
北井博文	葛飾区西小岩4-5-3	(697)6867
栗原公	文京区小石川4-13-12	(811)6176
佐藤喜則	市川市本北方3-1-16	0473(35)3409(福田)
嶋根紹	横浜市神奈川区六角橋6-13-35	045(421)8252
下川昭宣	北区滝野川2-46-13 門井方	(910)0050
寺田栄	埼玉県川口市並木町3-5-12富士見荘	
福永巨	葛飾区四ツ木1-17-8	(693)3073
牧田善晴	芸大寮	
宮本富美夫	中野区本町2-35-5	(372)5044
元吉治		

45年度

浅井健作	杉並区高円寺南4-3-15	(311)8745
江波戸恵子	千葉県習志野市谷津町5-1126	0474(72)9182
尾方徳司	練馬区上石神井1-79-3 芸大寮	(920)0863
金子健二	埼玉県与野市大字大戸2	0488(62)5074
木戸修	世田谷区尾山台2-31-13	(701)3963
倉本康生	豊島区千早町1-33	(957)2511
栗原俊明		
酒井道久		
関正司	神奈川県鎌倉市手広1535	0466(23)4104
出町民夫	芸大寮	
東条義江	文京区大塚3-5-2	(946)8977
中村和雄	中野区松ヶ丘2-16-5 光風荘	(202)6621

浜野邦昭 芸大寮
 日暮敏恵 台東区上野公園内東京芸大東台寮 (823)2876
 平田道則 板橋区中板橋10 北川方 (961)6518
 藤江暁 神奈川県厚木市下古沢274 0462(21)4970
 南哲家 荒川区西尾久5-18-7 宮内方 (893)0350
 村上博史 北区上中里1-43-5 橋本荘
 村野幸夫 埼玉県入間市宮寺1927
 和田雄之助 芸大寮

46年度

秋山節雄 練馬区上石神井1-79-3 芸大寮 (920)0863
 厚地正信 "
 安倍和子 豊島区西池袋3-6-9 三輪方301号 (981)1422
 伊東緑 練馬区豊玉中2-8 横山方 (992)0772
 井上富美男 西多摩郡羽村町羽1587 0425(54)1072
 小幡満 豊島区雑司谷2-18-13 たつみ荘 (983)2727
 甲斐文彰 武蔵野市境1-4-9 田家方
 木村裕子 神奈川県相模原市鶴野森925-31 0427(45)4609
 木村義一 保谷市泉町5-7-12 0424(21)5070
 久保田和子 練馬区桜台5-40 (992)8090
 熊川哲二 世田谷区桜丘2-2-1 (429)1547
 黒田幸治 埼玉県越ヶ谷市蒲生旭町8-3(434) 0489(64)4314
 新庄貞嗣 中野区本町2-34-6 石塚アパート (373)2037
 田中毅 練馬区練馬2-6-15 田中方 (991)9274
 寺見章 台東区松が谷3-7-6 (841)1947
 萩原清光 草加市谷塚町1223 0489(25)6931
 浜野祥一 豊島区長崎2-33-3 白雲荘 (
 松枝秀明 荒川区東日暮里4-24-15 (807)4380
 宮沢清日子 日野市多摩平2-8-1 公住187の3 0425(81)8769
 村田妙子 練馬区春日町5-4-10 美原荘 (990)6803
 百瀬啓一郎

47年度

秋山恭子 中野区鷺宮1-28-2 (330)0664
 芦川龍彦 品川区戸越5-19-12 (782)0302
 池田秀俊 横浜市旭区鶴ヶ峰2-36-2 045(381)4798
 宇賀地洋子 台東区上野公園内東京芸大東台寮 (823)2876
 金城寛 芸大寮
 小林令明 世田谷区赤堤3-5-6 広畑方 (328)1994
 佐藤正身 練馬区東大泉町315 大泉公務員住宅5-1 (924)6133
 清水靖 練馬区大泉学園町935 大泉学生会館 (922)6116

高本留美 埼玉県新座市片山115 西部方 0424(21)4606
 龍野隆 目黒区中央町1-8-11 平井荘内 (712)5804
 立川玄八 荒川区西日暮里3-17-13 (821)3865
 田中康憲 練馬区富士見台4-3-32 古屋方 (999)0306
 富木昌子 東台寮
 中野滋 市川市東菅野3-7-10 0473(34)9090
 中村和彦 田無市西原町3-6 三井金属社宅 0424(64)8234
 浜崎茂 世田谷区代沢1-33-8 田園荘 (411)2928(長岡)
 深井隆 北区志茂4-29-2 (901)2502(稲垣)
 益田良司 芸大寮
 松井洋 神奈川県逗子市逗子7-9-10 吉沢アパート 0468(71)4983
 宮脇正雄 板橋区仲宿29-14 田下荘 (963)0255
 村田徹 練馬区東大泉町9 前原方 (922)4999
 森田伸 東台寮
 渡辺紀久子 新宿区東五軒町43 (260)4656

編集後記

1972年度の芸術祭にあたり我々彫刻科は全学年・大学院及び先生方の協力を以ってここにこのような小冊子を完成しました。芸術祭のあり方について中心的に活動を余儀なくされる二学年内部において活発な討論があり、芸術祭の二次的産物になりつつある作品展示をもう一度真剣に考えようとの結論に達しました。よって作品展示の補助的役割をになう物としての小冊子が1969年以来の復活をみた次第です。しかしながら全てが初めての事であり企画編集に携わった私達も内容面について大いに反省すべき点を感じています。来年・再来年とこの小冊子の本質的發展を祈ります。なおこの小冊子を発行するにあたり御協力を下さったスポンサー各位に対し厚く厚く感謝致します。

責任編集者 小幡 満

モデルは プールヴァー モデル紹介所

台東区上野桜木1-5-9

TEL 822-1641(代表)

郵便番号 110

画材はなんでも

タカヤマ画材店

東京都台東区谷中7-4-1

TEL (828)3703

日本画材料

宮内得応軒

宮内盛雄

東京都台東区谷中1-1-22

TEL (821)4643

中国から輸入した油絵具

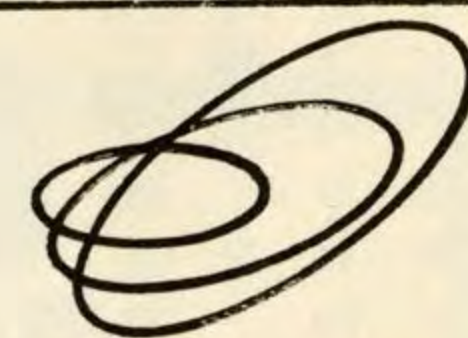
フライングイーグルオイルカラー

中国画材池袋店

池袋東口西武前

TEL (988)6531(代)

美術写真



株式会社

三友写真巧房

東京都文京区春日2-2-7

TEL (811)4445, 5151

Dapier
galerie

前田利昌個展

9月25日～30日

1968年大学院修了(小磯教室)

1969年フランス政府給費留学

パピエ画廊

東京都中央区銀座8-8-1 出雲ビル

TEL (571) 1721～2

銀座店・いよいよ改装なり、芸術界の為
有意義な企画を計画中

大阪店・目下船場に十月新装開店を
目標として準備中



現代彫刻センター

銀座店 東京都中央区銀座3-10-19

大阪店 大阪市東区備後町3-35

ローマ店

VIA MONTE BIANCO 119/5 00141-ROME

柳屋画廊 YANAGIYA GALLERY

東京都中央区日本橋通2-2

TEL (271) 8482

貸画廊

竹川画廊

11:00AM～7:00PM、
壁面1階14.5m 2階18m

東京都中央区銀座7-7-7

TEL (571) 0320



油絵・彫刻

サエグサ画廊

銀座店 中央区銀座7-7-8

TEL (571) 8955, 8956

丸ノ内店 千代田区丸ノ内3-3-1

新東京ビル2F TEL (212) 7748

京二画廊

貸および企画

東京都中央区京橋2-13

TEL (561) 6778, 7061

木彫道具製作販売

小信製作所

東京都田無市北原町1-15-24

TEL 0424(61) 4996



内外・絵画・彫刻・30年の信用を誇る画廊

フジカワ画廊

大阪本店

大阪市東区瓦町2丁目(堺筋)

TEL (231) 4536(代) 1490(日祭日用)

東京店

東京都中央区宝町1-8(昭和大通)

TEL (561) 3701

福岡店

福岡市大名2-9-37

TEL (77) 4778